豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

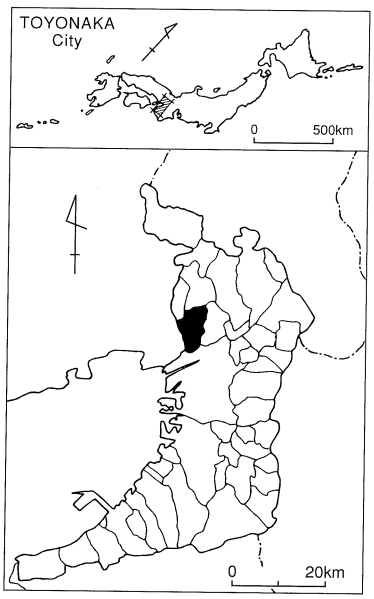
平成11年度（1999年度）

平成12年（2000年）3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成11年度(1999年度)



平成12年(2000年)3月

豊中市教育委員会

序　　文

豊中市は、大阪府の北部に位置し、西は兵庫県に接しています。県境を流れる猪名川から常に豊かな水がもたらされ、北方の千里丘陵にかつて広大な森林をひかえていたこの地では、古くから人々の生活の場が育まれ、多くの歴史的遺産を受け継いできました。一方、大都市圏との地理的な関係から、早くから近郊都市あるいはベッドタウンとしての大規模開発が足早に進められ、すみやかに埋蔵文化財の保護に取り組む必要がありました。しかしながら、近年では都市開発が沈静化しつつあり、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模な開発が増加するなど、新たな対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書では、平成11年度に調査を実施した野畑春日町遺跡・原田遺跡・蛍池北遺跡に加え、平成10年度後期に調査を実施した岡町北遺跡の成果も合わせて掲載しました。野畑春日町遺跡では、縄文時代中期の集落跡の広がりを確認し、市域では稀少な縄文時代の資料を提示したほか、原田遺跡では原田城南城関連の遺構が検出されるなど、各遺跡で新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代にくらす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成12年（2000年）3月31日

豊中市教育委員会
教育長　栗原有史

例　　言

1．本書は、平成11年度国庫補助事業（総額5,000,000円、国庫50％、市費50％）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成10年度国庫補助事業として実施した岡町北遺跡第５次調査の成果を併せて収録するものである。

2．平成11年度事業として、平成11年4月12日から平成12年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。

3．発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げる。

4．本書の作成は、各報告の執筆を調査担当者が実施したが、岡町北遺跡第５次調査の成果については橘田正徳が執筆した。また、全体の編集を清水　篤が実施した。

5．各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、国土座標系に基づく座標北を示す。また各挿図に掲載した座標は、第Ⅵ座標系に基づく。

6．挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。

7．各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成10年度（平成11年２月以降）発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
岡町北遺跡	第５次	岡町北2－66－30	32.75㎡	川村慎也	1999年2月1日 ～2月5日

平成11年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
野畑春日町遺跡	第３次	春日町3－58－1・130	200㎡	清水　篤	1999年4月12日 ～5月19日
原田遺跡	第２次	曽根西町2－124－2 141－2	84㎡	清水　篤	1999年9月1日 ～9月22日
蛍池北遺跡	第24次	蛍池北町2－43－4	68.25㎡	橘田正徳	1999年10月1日 ～10月22日
蛍池北遺跡	第25次	蛍池北町2－31－4	112.05㎡	橘田正徳	1999年10月13日 ～11月22日

目　　次

第Ⅰ章　位置と環境 …… （清水）
　1．地質環境 …… 1
　2．歴史環境 …… 1
第Ⅱ章　岡町北遺跡第５次調査 （橘田）
　1．調査の経緯 …… 5
　2．調査の成果
　（1）基本層序 …… 5
　（2）検出した遺構 …… 6
　3．まとめ …… 7
第Ⅲ章　野畑春日町遺跡第３次調査 （清水）
　1．調査の経緯 …… 8
　2．調査の成果
　（1）既往の調査 …… 8
　（2）検出した遺構 …… 10
　（3）出土遺物 …… 11
　3．まとめ …… 11
第Ⅳ章　原田遺跡第２次調査 （清水）
　1．調査の経緯 …… 12
　2．調査の成果
　（1）既往の調査 …… 12
　（2）検出した遺構 …… 14
　（3）出土遺物 …… 16
　3．まとめ …… 16
第Ⅴ章 蛍池北遺跡第24次調査 （橘田）
　1．調査の経緯 …… 17
　2．調査の成果
　（1）基本層序 …… 17
　（2）検出した遺構 …… 19
　3．まとめ …… 19
第Ⅵ章　蛍池北遺跡第25次調査 （橘田）
　1．調査の経緯 …… 20
　2．調査の成果
　（1）基本層序 …… 20
　（2）検出した遺構 …… 22
　3．まとめ …… 23

挿　図　目　次

（第Ⅰ章）

第１図　市内遺跡分布図（1：50,000）…… 2
第２図　調査地点と周辺地形（1：40,000）…… 4

（第Ⅱ章）

第３図　調査範囲図（1：200）…… 5
第４図　調査地位置図（1：5,000）…… 5
第５図　調査区平面・断面図（1：50）…… 6

（第Ⅲ章）

第６図　調査範囲図（1：1,000）…… 8
第７図　調査地位置図（1：5,000）…… 8
第８図　検出遺構平面・断面図（1：100）…… 9

（第Ⅳ章）

第９図　調査範囲図（1：500）…… 12
第10図　調査地位置図（1：5,000）…… 12
第11図　検出遺構平面・断面図（1：80）…… 13
第12図　土坑１土器出土状況平面図（1：20）…… 14
第13図　出土遺物（1：4／1：6）…… 15

（第Ⅴ章）

第14図　調査範囲図（1：400）…… 17
第15図　調査地位置図（1：5,000）…… 17
第16図　調査区平面・断面図（1：50）…… 18

（第Ⅵ章）

第17図　調査範囲図（1：400）…… 20
第18図　調査地位置図（1：5,000）…… 20
第19図　調査区平面・断面図（1：50）…… 21
第20図　ＳＰ－８…… 22
第21図　溝３土層断面…… 23

図　版　目　次

図版１　岡町北遺跡第５次調査
（１）調査区全景
（２）調査区壁面断面（南壁）
（３）ＳＰ－１土層断面
（４）ＳＰ－２土層断面

図版２　野畑春日町遺跡第３次調査
（１）調査区全景（南から）
（２）調査区北半部ピット群（北から）

図版３　野畑春日町遺跡第３次調査
（１）出土遺物（縄文土器）
（２）出土遺物（石器）

図版４　原田遺跡第２次調査
（１）調査区全景（北東から）
（２）調査区全景（南から）

図版５　原田遺跡第２次調査
（１）土坑１土器出土状況（東から）
（２）土坑２土器出土状況（西から）

図版６　原田遺跡第２次調査
（１）井戸内埋土堆積状況（西から）
（２）掘割土器出土状況（東から）

図版７　原田遺跡第２次調査
（１）出土遺物（弥生終末期甕）
（２）出土遺物（弥生土器）

図版８　原田遺跡第２次調査
（１）出土遺物（中世）

図版９　蛍池北遺跡第24次調査
（１）調査区全景（北側）
（２）調査区全景（南側）

図版10　蛍池北遺跡第25次調査
（１）調査区全景（北側）
（２）調査区全景（南側）

第Ⅰ章　位置と環境

1．地質環境

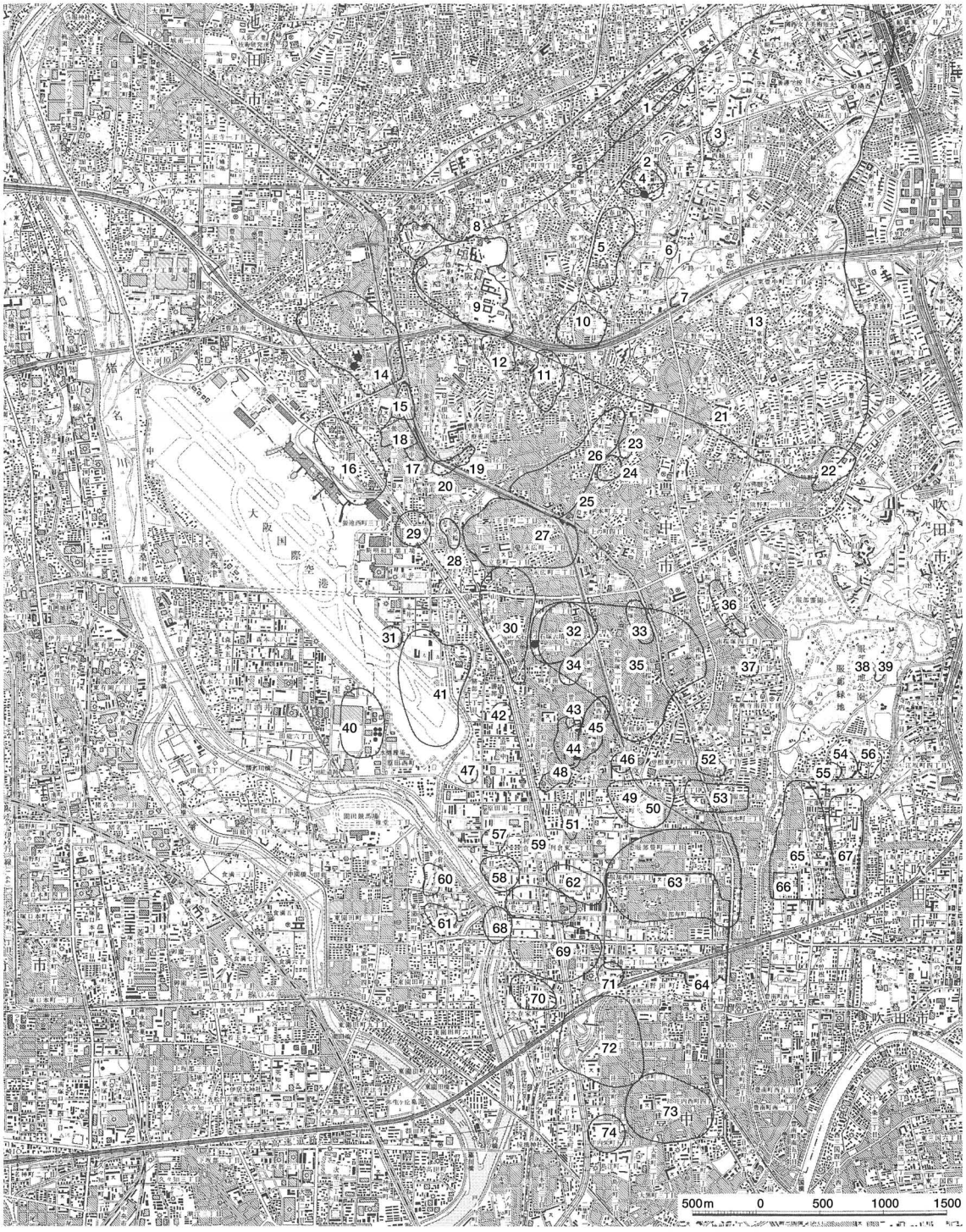
豊中市の地形は巨視的にみれば、北部と南部に分割して捉えることができる。北部では丘陵地とそれから派生する段丘が台地状の地形を形成し、南部は主として猪名川によって形成された氾濫原と大阪湾へつながる沖積低地で構成されている。北部の丘陵地の背後には、箕面から茨木に通じる低地を挟んで、丹波山地がひかえる。山地を構成する基盤岩類（丹波層群）は、豊中市域では地下深く埋没し、その上部を神戸層群、大阪層群の堆積物が分厚く覆い、露頭は見られない。神戸層群についても旧島熊山周辺を中心に、わずかながら、その露頭が確認されるにすきず、北部の丘陵地では大阪層群が、人間活動の諸痕跡を検出し得る最古の基盤層となっている。また、市域の丘陵地は千里丘陵の西端部にあたり、この千里丘陵の続く吹田市でも大阪層群を基盤層とした遺跡が展開している。これら丘陵地は千里川や天竺川に浸食されながら、段丘を形成していくが、とくに中・低位段丘の発達が顕著で、上野付近から曽根にかけて台地状に広がる段丘上には古墳群をはじめ、様々な遺跡が展開している。

一方、これら段丘の縁辺から南部の低地にかけての沖積地は、縄文海進に代表される海水位の変動に伴って陸化した時期には生活域とされ、また、河川の氾濫作用によって形成された自然堤防上も格好の生活の場となった。原田から曽根を通り、吹田市の垂水へと直線的に続く段丘崖は、縄文海進時の海食崖である可能性が高く、猪名川の主流路、河内湾岸を流れる海流の方向性等の相互作用によって形成されていったと考えられる。河川氾濫による自然堤防の形成は、その後、大規模な埋め立てによる地形の改変を受けるまで、弥生～古墳時代集落の立地等に寄与するとともに、それら低地の集落に特有の独立性をも保持する遠因ともなってきた。市域南部の低地全体を耕地開発の対象とし、導・排水路等の本格的な基盤整備が行なわれるのは少なくとも平安時代以降のことで、それまでは自然堤防や後背湿地が網の目のような流路の間隙に点在する環境が永らく続いたものと考えられる。

2．歴史環境

前年度と今年度に調査を実施した5箇所の遺跡の中で、野畑春日町遺跡は市域北部の丘陵部で標高50m前後の中位段丘上に立地する。一方、岡町北・蛍池北遺跡は、台地状に広がる低位段丘上に、また、原田遺跡は低位段丘及び段丘斜面直下の低地に位置する。ここでは5箇所の遺跡を中心として関連する諸様相を時代ごとに概述する。

縄文時代　現在、市域内で縄文時代集落が検出されるのは、北部の丘陵地域に限られている。中でも千里川中流域以北の中位段丘上に密集する、柴原（晩期）・内田（後期）・野畑（中～後



１．太鼓塚古墳群　２．野畑春日町古墳群　３．野畑遺跡　**４．野畑春日町遺跡**　５．少路遺跡　６．桜井谷石器散布地　７．羽鷹下池南遺跡
８．待兼山古墳　９．待兼山遺跡　10．内田遺跡　11．柴原遺跡　12．北刀根山遺跡　13．桜井谷窯跡群　**14．蛍池北遺跡**　15．蛍池東遺跡
16．蛍池西遺跡　17．蛍池遺跡　18．麻田藩陣屋跡　19．南刀根山遺跡　20．御神山古墳　21．上野遺跡　22．熊野田遺跡　23．金寺山廃寺跡
24．新免宮山古墳群　25．金寺山廃寺塔刹柱礎石　26．本町遺跡　27．新免遺跡　28．箕輪東遺跡　29．箕輪遺跡　30．山ノ上遺跡
31．走井遺跡　**32．岡町北遺跡**　33．岡町遺跡　34．岡町南遺跡　35．桜塚古墳群　36．下原窯跡群　37．長興寺遺跡　38．梅塚古墳
39．埴輪散布地　40．原田西遺跡　41．勝部遺跡　42．勝部東遺跡　43．原田城跡　**44．原田遺跡**　45．曽根遺跡　46．曽根東遺跡
47．原田中町遺跡　48．原田元町遺跡　49．埴輪窯跡　50．豊島北遺跡　51．豊島南遺跡　52．城山遺跡　53．服部遺跡　54．若竹町遺跡
55．石蓮寺廃寺　56．寺内遺跡　57．利倉北遺跡　58．利倉遺跡　59．利倉南遺跡　60．利倉西遺跡　61．椎堂の前遺跡　62．服部遺跡
63．穂積遺跡　64．穂積村囲堤　65．小曽根遺跡　66．春日大社南郷目代今西氏屋敷　67．北条遺跡　68．上津島川床遺跡　69．上津島遺跡
70．上津島南遺跡　71．穂積ポンプ場遺跡　72．島田遺跡　73．庄内遺跡　74．島江遺跡

第１図　市内遺跡分布図（１：50,000）

期）・野畑春日町（中～晩期）の各遺跡では住居こそ検出されていないものの、居住域であったことは確実である。基本的には中～後期を中心に集落が営まれていたようであり、今年度の野畑春日町遺跡の調査でもその広がりが確認されたわけである。一方、市域南部に広がる低地上の遺跡でも縄文土器が散見されるとともに、段丘縁辺部の服部遺跡では縄文前期の遺物も出土することから、河川上流域の丘陵地を中心とした生活圏と、縄文海進を契機とした内湾沿いの生活圏が並立していた可能性が高い。

弥生～古墳時代　蛍池北遺跡は、弥生中～後期にかけての墓域を伴った集落遺跡として著名である。地質環境の項で触れた、丹波山地との境界を流れる箕面川左岸の中位段丘に立地する。市域西部の勝部遺跡などの弥生前期から始まる集落は、当初、猪名川あるいは千里川下流域沿いに展開していた。中期段階になって段丘上に移動、後期にかけて分村、拡大化していく過程で新免遺跡や蛍池北遺跡が拠点的な集落として台頭してきたものと考えられる。また、こうした集落は南部の低地に立地する穂積遺跡なども含めて、古墳時代前期に一旦、人間活動の痕跡が途絶える。これらの現象は中位段丘の中央部に桜塚古墳群が成立していくことと無関係ではなかろう。しかし、古墳後期には再び集落としての機能が復活するとともに、蛍池北遺跡や穂積遺跡では小規模ながらも古墳が築造されるなど、新たな集団の出現に伴って、地域間の関係においても、従来の枠組みを再編する動向を見ることができる。

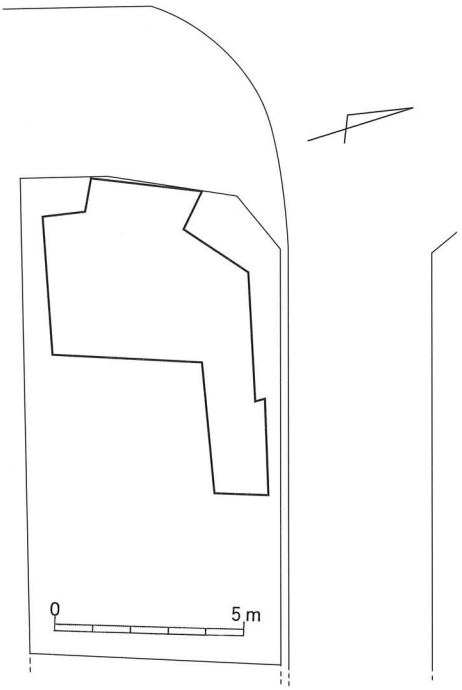
古代～中世　古代～中世にかけての集落は、官衙的な色彩の強い曽根遺跡などを除いて、耕地開発の経緯や規模に影響されながら、段丘上や低地に展開していく。今年度の調査対象である原田遺跡は、弥生後期の集落であるとともに、山ノ上遺跡などと同様、段丘の先端部に発生していく集落として中世前期頃にはすでに成立していたと考えられる。また、原田遺跡では15世紀前半に築城されたといわれる、原田城跡をその範囲に包括しており、従来からその重要性が指摘されてきた。原田城跡は、北城と南城の二城が並立していたと考えられており、北城については第１次調査において、15～16世紀前半の小規模な堀割、16世紀後半の巨大な堀割が検出されている。これらについては前者が周辺の開発にかかわった領主居館に伴うもの、後者が織田信長と荒木村重の対立による緊張関係を背景に掘削されたものと位置づけられている。今年度の調査地は、南城を囲繞する堀割の東側に隣接し、解明されていなかった原田城南城部分についての知見が得られるものと期待された。

第２図　調査地点と周辺地形（１：40,000）

第Ⅱ章　岡町北遺跡第５次調査

１．調査の経緯

当調査区は豊中市岡町北２丁目66－30に所在する。個人住宅の建設に伴い、平成10年（1998年）12月16日に提出された周知の埋蔵文化財発掘の届け出に基づき、平成11年（1999年）１月19日に試掘調査を実施したところ、地表下約1mのところで遺構面を検出した。これに伴い協議を行った結果、建物等の基礎により敷地の一部で遺構の損壊は避けられないことが明らかとなった。このため、平成11年（1999年）２月１日から５日までの期間で、遺構が破壊される32.75㎡を対象に発掘調査を行なった。

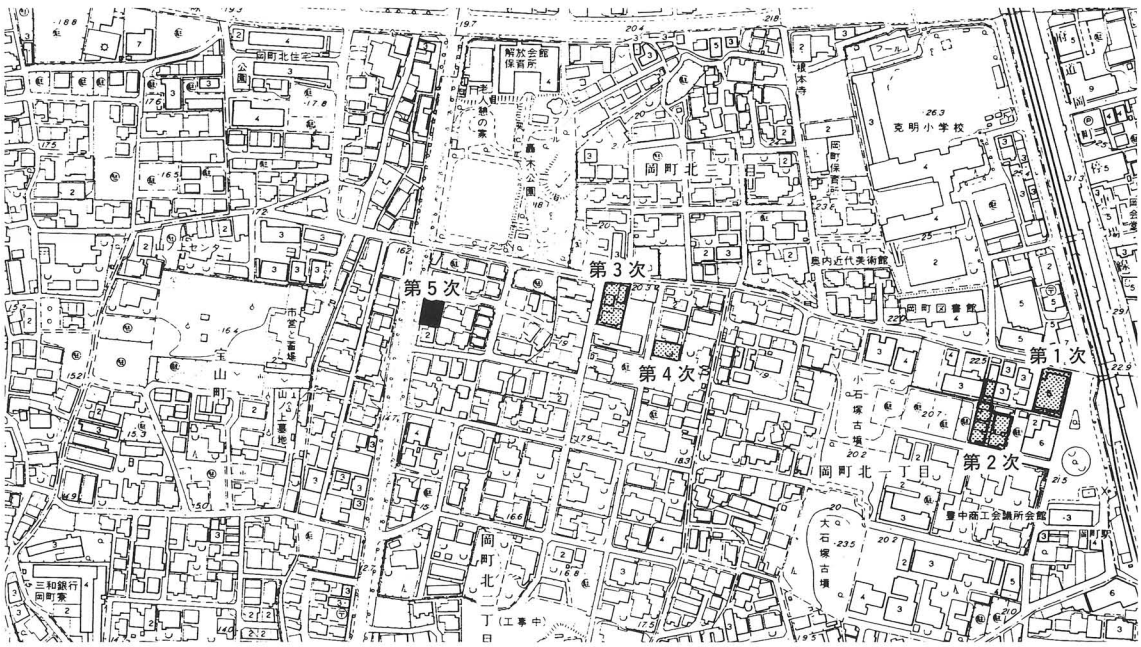


第３図　調査範囲図（１：200）

２．調査の成果

（１）基本層序

当調査区は、通称豊中台地から派生する低位段丘上にあり、その西側は南北に伸びる開析谷に接する。よって、丘陵や河川からの土砂の供給は受けにくく、また中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境にある。このため、当調査区においては近現代の宅地造成に伴う整地土が層厚80

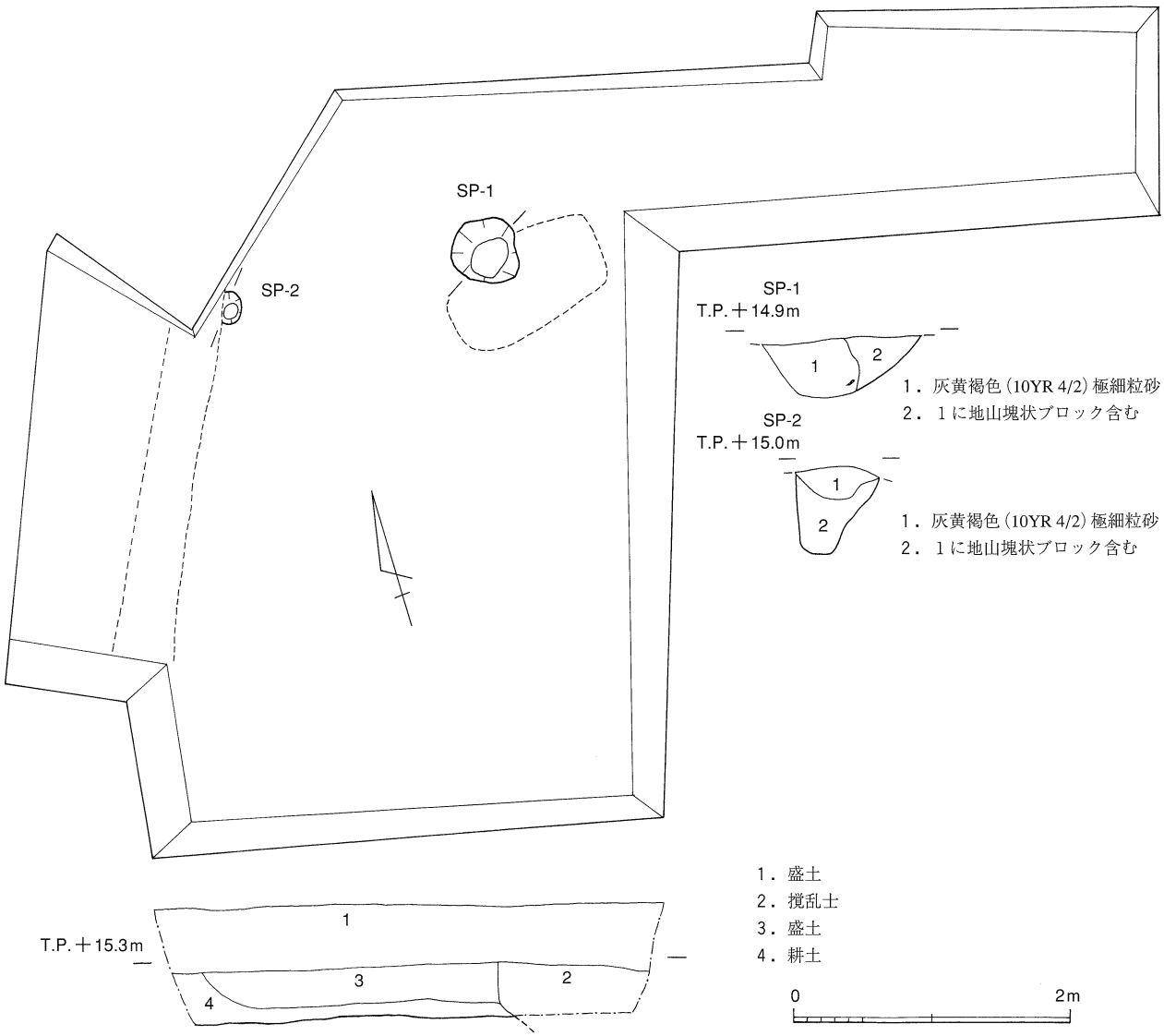


第４図　調査地位置図（１：5,000）

cmほど堆積するにもかかわらず、遺構上面に及ぶ削平を受け、遺物包含層などの堆積は見られず、遺構は耕作土直下の段丘堆積層上面で検出した。

（２） 検出した遺構

調査区は32.75㎡と限られていることもあって、検出した遺構は柱穴２基に留まる。このうち、ＳＰ－１は調査区中央付近で検出した、直径45cm、検出面からの深さ18cmをはかる方形に近い平面形状を呈する柱穴である。埋土は灰黄褐色極細粒砂と黄橙色シルトからなるベースブロッ



第５図　調査区平面・断面図（１：50）

クの混合土からなる。なお、柱穴の一部は試掘段階で破壊しているため残存状態は良好とはいえず、土層断面の観察でも明確な柱痕は確認できなかったが、試掘時および検出時の段階では、柱根を確認していることから今回の報告では柱穴として扱うことにした。ＳＰ－１からは土師器細片が出土しているものの、器壁外面の風化が著しく、時期は明確にできなかった。

ＳＰ－２は、調査区東部で検出した直径25㎝、検出面からの深さ25㎝をはかる柱穴である。埋土はＳＰ－１に類似し、下層に直径10～15㎜の礫を含む。ＳＰ－２は撹乱による削平をうけ、遺構の過半は破壊されているため平面形は確定しにくいが、残存部分からみて、円形を呈するものと考えられる。なお、ＳＰ－２からは遺物は出土しなかった。

３．まとめ

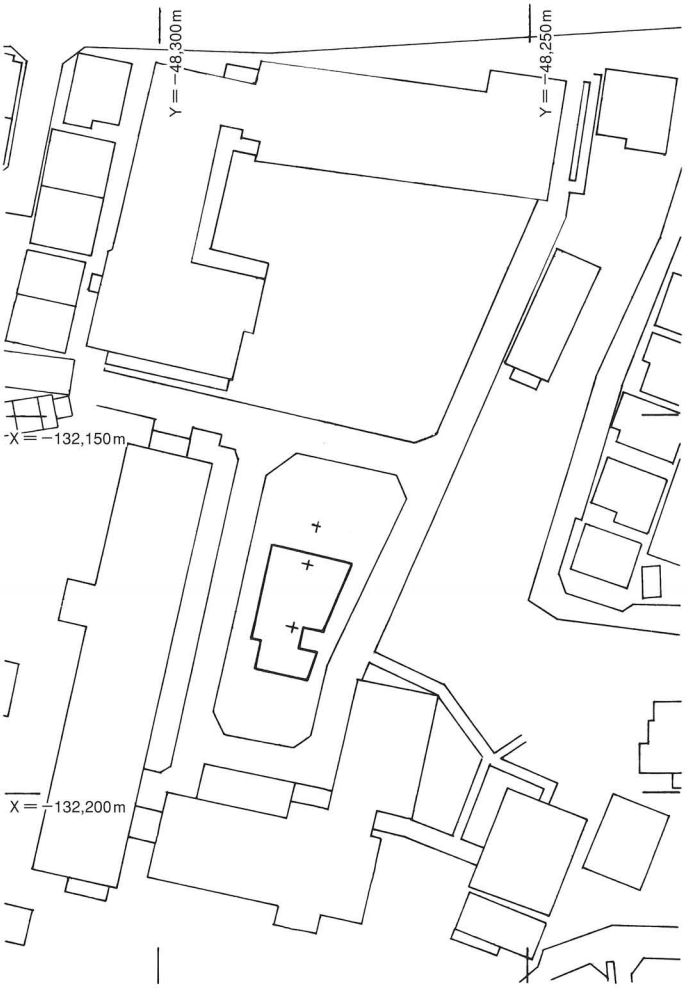
以上、今回の調査では柱穴２基を検出した。柱穴の時期については明確にできるほどの遺物が出土していないため判然とはしないものの、埋土の状況と周辺調査区における成果を踏まえると古墳時代後期以前の所産となる可能性が想定できる。また、これらの柱穴が検出されたことにより、当該調査区周辺に掘立柱建物もしくは竪穴住居等の集落関連遺構が存在することは確実となった。このことは、岡町北遺跡における集落の範囲が、遺跡の西端を区切る開析谷との地形界付近にまで及ぶということを意味し、今回の調査が段丘上における集落の土地利用の状況を考えるうえで注意すべき資料を提起したといえよう。

なお、岡町北遺跡のように開析谷もしくは段丘崖などの地形界の間際にも集落の範囲が及ぶことは新免遺跡などでも明らかにされており、今後集落の範囲を推定する場合において、地形との関連を留意する必要があることを提起したい。

第Ⅲ章　野畑春日町遺跡第３次調査

１．調査の経緯

当該調査区は、豊中市春日町３丁目58－１・130に所在する。修道院、礼拝堂等の建て替えに伴って、試掘調査を行なったところ、敷地北側の一部に遺構面と遺物包含層が検出された。その他の構造物の建築範囲に関しては遺構の広がりが認められず、協議の上、調査の必要があると判断された部分について、平成11年（1999年）４月12日から５月19日までの日程で調査を実施した。

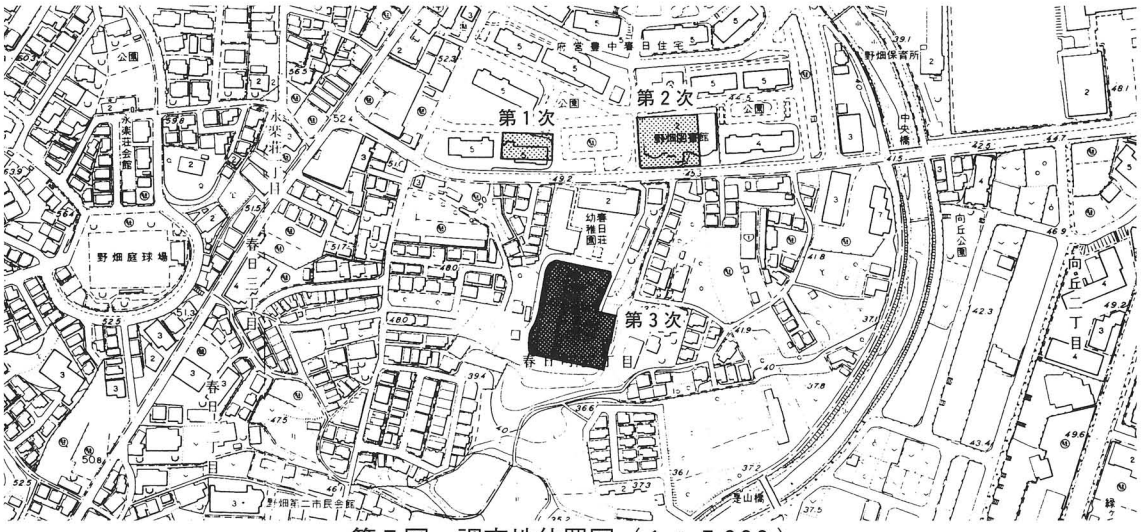


第６図　調査範囲図（１：1,000）

２．調査の成果

（１）既往の調査

野畑春日町遺跡では過去に２回の調査が行なわれており、土坑等を中心とした遺構群や、縄文時代中期～



第７図　調査地位置図（１：5,000）

1．表土及び盛土、整地土。　2．褐灰色（10YR5/1～6/1）細粒砂。φ10mm以下の細礫少量、炭化物微量及びマンガン粒微量含む。
3．耕作土層（近～現代？）。褐灰色（10YR6/1）中粒砂（～極粗粒砂）。φ10mm以下の細礫を５％以下含む。上位には第二酸化鉄が縞状に沈着する部分も有。炭化物微量含む。しまり不良。
4．にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂（～極細粒砂）。粗粒砂～細礫少量含む。
5．褐灰色（10YR5/1～4/1）細粒砂（～極細粒砂）。黄褐色（10YR5/6）シルト（～極細粒砂）。基盤層ブロックを20%、粗粒砂～細礫微量含む。
6．にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂（～極細粒砂）。粗粒砂～細礫少量含む。
7．耕作土層（近～現代？）。褐灰色（10YR4/1～10YR6/1）細粒砂（～極細粒砂）。中粒～極粗粒砂、細礫を10％程度、φ20mm未満の礫を微量含む。部分的に鉄分沈着。しまり不良。
8．灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂（～細粒砂）。にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂ブロック若干混入。φ20mm大の礫も混入。
9．黒褐色（10YR3/2）極細粒砂。にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂ブロック10%、にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂ブロック10%含む。炭化物少量、φ20mm大の礫極少量混入。
10．黒褐色（10YR3/1）極細粒砂（～細粒砂）に黄褐色（10YR5/6）極細粒砂ブロック10%混入。粗粒砂～細礫微量含む。
11．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂（～シルト）に基盤層ブロック少量、粗粒砂～細礫微量含む。　12．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂（～シルト）。にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂、中～粗粒砂５％含む。
13．褐灰色（10YR4/1）細粒砂と黄褐色（10YR5/6）極細粒砂（～シルト）の混合層。　14．15の土壌化層。
15．基盤層。黄褐色（10YR5/6）シルト（～細粒砂）。φ20mm程度までの礫を10%以下含む。堅緻。南半部では長径100mm前後の亜円礫が90%を占める。洪積層上部。
16．褐灰色（10YR4/1～10YR5/1）中粒砂（～細粒砂）。基本的には耕作土層であるが、当該層分布域の基盤が礫層であることから、礫を大量に含む。
17．耕作土層（近～現代？）褐灰色（10YR5/1）中粒砂（～極細粒砂）。φ20mm以下の礫を５％程度含む。未分解の植物遺体、炭化物を少量含む。しまり不良。
18．耕作土層？。褐灰色（10YR5/1）中粒砂（～極細粒砂）。φ10mm以下の亜円礫を多く含む。
19．14に酷似。ただし、礫の含有率が10%程度高い。部分的に黒褐色（10YR3/1）を呈するが、明瞭な遺構の輪郭は検出できなかった。

第８図　検出遺構平面・断面図（１：100）

後期、縄文時代晩期～弥生時代前期、古墳時代後期の３時期にわたる土器群が検出され、特に縄文時代集落については、千里川右岸の段丘斜面にも展開していたことが判明した。対岸北東側には野畑遺跡の縄文時代中期～後期の集落が立地し、石器製作の痕跡なども明確にされたことから千里川を挟んだ両岸に縄文時代中・後期の生活域の広がりが確認されたことになる。過去２回の調査では、検出された土坑群が縄文時代の土坑墓である可能性が示唆されてきた。しかしながら、調査後の脂肪酸分析においてコレステロールは検出されたものの、高等動物の内臓に特徴的な高級脂肪酸がほとんど残留していなかったことから、理化学的見地からは土坑墓としての機能に疑問が残った。したがって、今後、この種の遺構に対する考古学的な再検討が必要とされた。

また、古墳時代後期の集落については周辺に分布する桜井谷窯跡群との関係において成立し得たものであり、出土した須恵器の帰属時期が窯跡群の消長に呼応するように集落が衰退していく状況を如実に示している。過去２回の調査ではいずれも衰退期にあたる時期の遺物が出土しており、以降に集落は存続しないことが明らかである。これらの事実は、野畑春日町遺跡より下流域の内田遺跡や、羽鷹下池南遺跡などでも７世紀初頭を最後に集落が廃絶する現象と符合し、須恵器生産の当該地域に与えた影響の強さを物語るものであろう。

（２）検出した遺構

今回の調査区では、第１次、第２次調査で検出された遺構群と同様、ピット、土坑、溝等を検出した。以下にその成果を概述する。

ピット　検出したピットは、各時期にわたるものが混在していることもさることながら、柱痕の有無やその規模の大小についてもばらつきが多く、古墳時代後期に該当する２間×１間の小規模な掘立柱建物１棟を除いて、明確に建物等を復元することはできなかった。しかしながら、石鏃を出土したピット等、縄文時代に帰属すると考えられるものも多数あり、調査区付近が居住域になっていたと考えて大過なかろう。

土坑　過去２回の調査同様、不定形な土坑、あるいは溝状の遺構を３基検出した。平面プラン、深度等に著しい差異があるものの、埋土の質感、色調はほぼ同様である。基本的には暗褐色系のシルトで構成されるが、黒色が強く、未分解の植物遺体等を多く含む部分があり、状況的には樹木の根株が基盤層を浸食して形成されたもの（風倒木痕）に近似している。遺物も土器片や石器が含まれるがいずれも細片であり、樹木の根株痕には、植物の腐食に伴ってできる空間にこのような遺物が包含されることがすでに指摘されている。また、古墳時代後期のピット群の一部は、この土坑が形成された以降に掘削されていることも調査段階で確認されている。これらの事象と前項で触れた脂肪酸分析の結果から、この土坑状の遺構群は、縄文時代を中心に生育していた樹木の痕跡である可能性が高い。現段階では断定することは避けたいが、今後、その埋土中に含まれる花粉を分析したり、樹種を同定することで、暖温帯常緑広葉樹林を構成する、たとえばアカガシ亜属等を検出できれば、先の推測に関しての蓋然性が高まり、付近の縄文集落がおかれてい

た環境復原に重要な意義を持つこととなろう。

溝状遺構　調査区内の中央付近に南北方向に掘削された溝状遺構と東西方向に２条の溝が直角に交差して検出された。埋土は灰色系の細粒砂を中心に構成されており、深度は比較的浅い。調査区全体を通じて、基盤層直上における遺物包含層の遺存状況が薄弱で、灰色系の耕作土が均質に堆積している状況が看取される。溝状遺構の埋土はこの耕作土層と同質であり、耕作行為に伴う溝である可能性が高い。地形的にも東側に向かって低くなることから、中央の南北方向に掘削された溝は、耕作地の境界をあらわすものとも考えられる。調査区付近は果樹等が植樹されていたとの伝聞もあり、近世以降の桜井谷周辺の開発に伴って、古墳時代以降に生育した森林が伐採され、畑等として利用された痕跡を示している。

（３）出土遺物

出土遺物については、細片が多く図化できなかったが、主要なものを図版に掲載した。縄文時代に帰属する遺物は、主として石器が大半を占め、土器では深鉢の体部破片が多い。石器のうち、トゥールでは石鏃とピエス・エスキエの砕片が挙げられる。ピエス・エスキエは、従来、クサビとしての機能が推定されてきたが、近年では石鏃製作のコアである可能性も示唆されており、集落内での石器製作に関わる遺物として留意すべきものである。一方、深鉢片の大多数は外面に縦位に撚りのゆるい縄文を施文するもので、キャリパー状にゆるく屈曲する部位の破片もある。口縁付近の破片には刺突も見られるが、沈線などは認められず、船元Ⅱ～Ⅲ式に該当するものと考えられる。また、器壁に縄文が施されず、口縁付近に刻目突帯などを持つグループもあり、近畿地方では晩期に位置づけられる遺物も若干存在している。古墳時代の遺物は須恵器がほとんどを占めるが、時期的には６世紀末～７世紀代のものが多く、桜井谷窯跡群衰退期の所産であることがうかがえる。

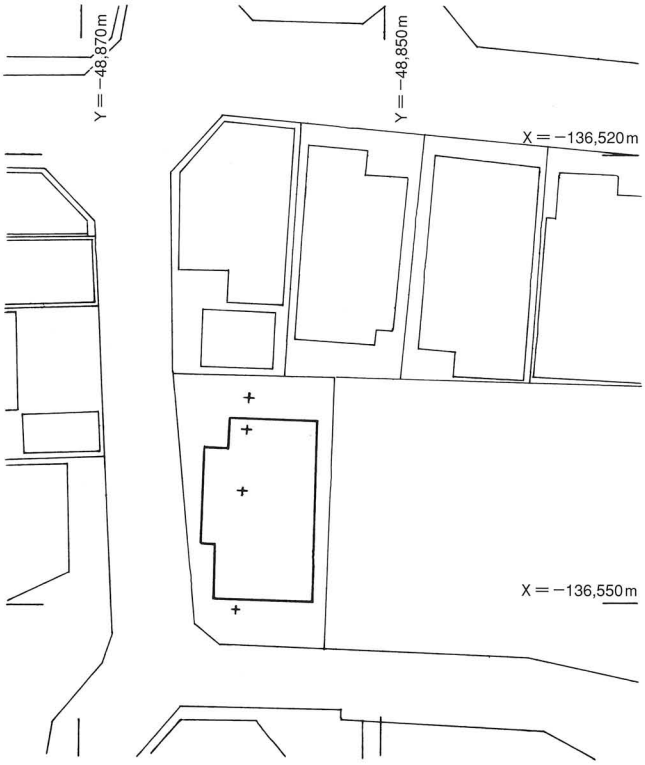
３．まとめ

今回の調査では、第１次、第２次調査で検出された、縄文時代中期を中心とした集落が南側に広がりを持ち、当該調査区付近にまで及んでいたことが確認された。また、古墳時代後期にも集落が営まれたが、近世以降の耕地開発によるまで人為的な造作はまったく行なわれなかった可能性が高いことも判明した。おそらく、縄文～古墳時代を通じて集落は当該調査区を南限として広がっていることも間違いなかろう。今後の周辺での調査に求められる課題としては、縄文時代の明確な遺構の特定及び、風倒木痕のあらゆる角度からの検討が挙げられる。

第Ⅳ章　原田遺跡第２次調査

１．調査の経緯

当調査区は、豊中市曽根西町２丁目141－2・124－2に所在する。個人住宅の新築に伴って、試掘調査を行なったところ、遺構面と遺物包含層が検出された。建築物の基礎に関しては掘削深度が浅く、埋蔵文化財への影響はなかったが、地盤改良杭の打設を伴う部分については調査の必要があると判断され、平成11年（1999年）９月１日から９月22日までの日程で調査を実施した。

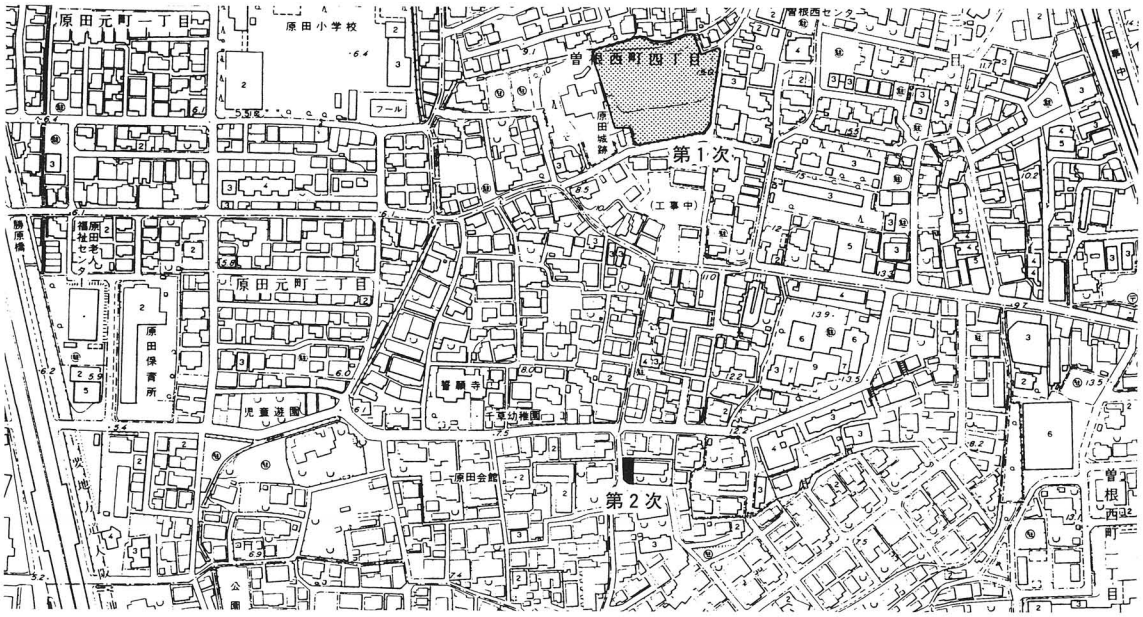


第９図　調査範囲図（１：500）

２．調査の成果

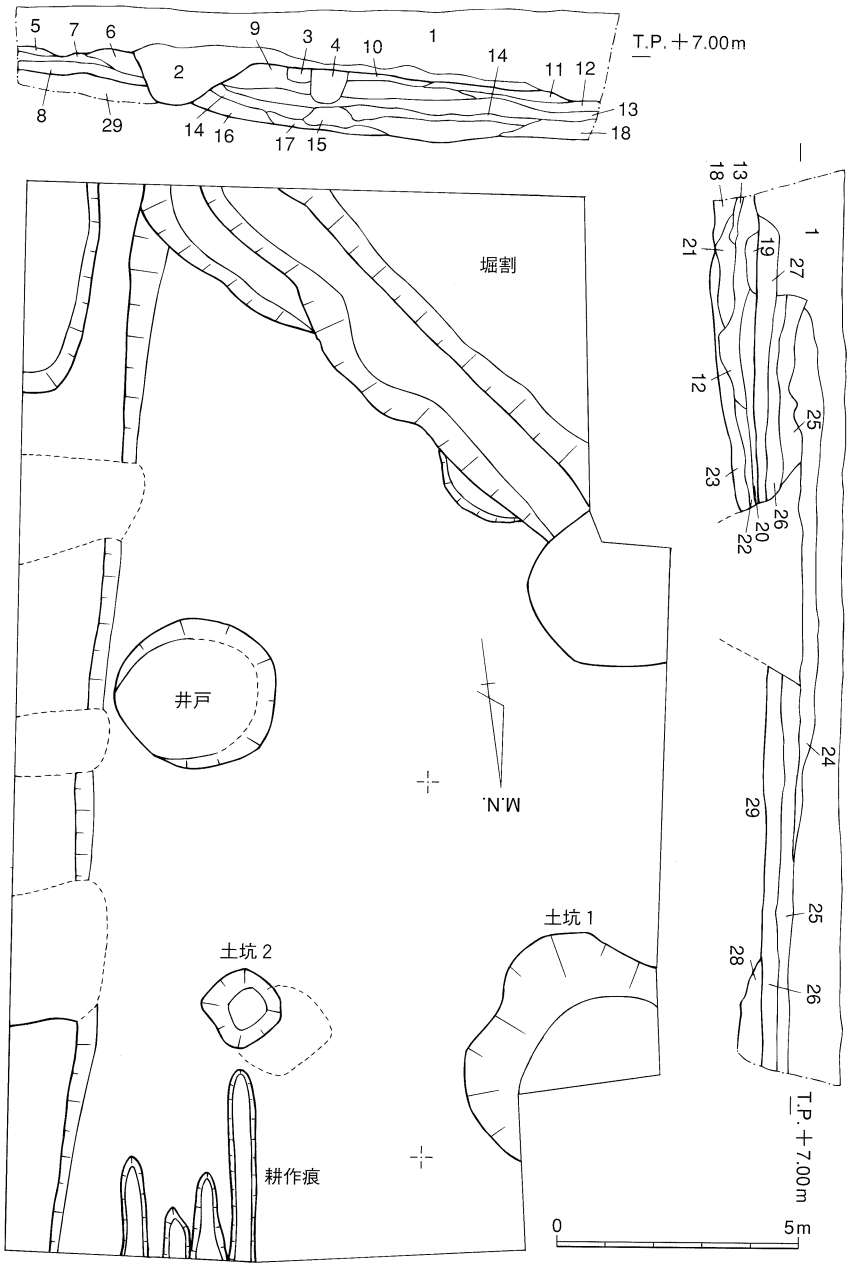
（１）既往の調査

原田遺跡では過去に第１次調査のみが行なわれており、東接する曽根遺跡同様、弥生後期を中心とした遺物や遺構が検出される一方、15世紀前半に築城され、戦国期に織田信長の軍勢が荒木



第10図　調査地位置図（１：5,000）

1．灰色（N4/0～N5/0）極細粒砂～シルト（中～粗粒砂30％含む）。灰白色（2.5GY8/1）極細粒砂～シルト（中～粗粒砂20％含む）ブロック20％、礫（φ10㎜以上）15％含む。鉄分による変色若干有。
2．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂～シルト（中～粗粒砂20％含む）。礫（φ10～30㎜）10％含む、遺物少量混入。鉄分による変色有。
3．黄灰色（2.5Y5/1）シルト～極細粒砂。礫（φ10～30㎜）少量含む。鉄分による変色有。　4．褐灰色（10YR5/1）シルト。礫（φ10～30㎜）10％含む。遺物少量混入。鉄分による変色若干有。
5．黄灰色（2.5Y5/1）極細～細粒砂。礫（φ10㎜程度）少量含む。鉄分による変色有。　6．褐灰～にぶい黄褐色（10YR5/1～5/3）極細粒砂～シルト。礫（φ10㎜程度）少量含む。
7．褐灰～灰黄褐色（10YR5/1～5/2）極細粒砂～シルト。礫（φ10㎜程度）少量含む。6と酷似。
8．黒褐色（10YR3/1）シルト～極細粒砂と灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂～シルトの混合土（７：３）。基盤層ブロック（φ10～50㎜）少量、礫（φ10～30㎜）少量含む。
9．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂～シルト。礫（10～30㎜）少量含む。鉄分による変色若干有。
10．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂～シルト。礫（φ10㎜程度）少量含む。基盤層ブロック（φ10～15㎜）15％混入。
11．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂～シルト。礫（φ10㎜程度）少量含む。鉄分による変色若干有。　12．褐灰色（7.5YR5/1）極細粒砂。礫（φ10～50㎜）少量含む。鉄分による変色若干有。
13．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂～細粒砂。礫（φ10～80㎜）少量含む。鉄分による変色若干有。　14．褐灰色（10YR4/1～3/1）極細粒砂～細 粒砂。礫（φ10～30㎜）少量含む。炭化物少量混入。
15．褐灰色（10YR4/1）粗粒砂～細粒砂。礫、石（φ10～100㎜）多量に含む。基盤層ブロック（φ30～50㎜）10％混入。



16．褐灰色（10YR4/1）細粒砂～極細粒砂（中～粗粒砂20％含む）。礫（φ10～30㎜）10％含む。基盤土ブロック（φ10～50㎜）10％混入。鉄分による変色有。　17．褐灰色（10YR5/1）粘土。
18．黄色（2.5Y7/8）細粒砂（中～粗粒砂20％含む）に褐灰色（10YR4/1）細粒砂～極細粒砂20％混入。礫（φ10～30㎜）少量含む。
19．褐灰～にぶい黄褐色（10YR5/1～5/3）極細粒砂～細粒砂（中～粗粒砂20％含む）礫（φ10～30㎜）少量含む。鉄分による変色有。
20．褐灰～にぶい黄褐色（10YR5/1～5/3）極細粒砂～細粒砂。礫（φ10㎜程度）少量含む。基盤層ブロック（φ20㎜以下）微量混入。鉄分による変色有。
21．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂～シルトに黒褐色（10YR3/1）シルトのブロック（φ10～30㎜）10％混入。　22．褐灰色（10YR5/1～4/1）極細粒砂～シルト。鉄分による変色若干有。
23．褐灰色（10YR5/1）粘土。　24．にぶい黄褐～褐灰色（10YR5/3～5/1）極細粒砂～シルト（中～粗粒砂20％含む）。礫（φ10～50㎜）15％含む。
25．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂～シルト（中～粗粒砂20％含む）。礫（φ10～30㎜）少量含む。鉄分による変色若干有。
26．灰色N4/0シルト～極細粒砂。礫（φ10～30㎜）少量含む。鉄分による変色若干有。
27．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂～細粒砂（中～細粒砂20％含む）。礫（φ10～30㎜）少量含む。鉄分による変色有。
28．黒褐～黒色（10YR3/1～2/1）シルトに灰黄褐色（10YR5/2）シルト～極細粒砂と基盤層の混合土が混入。遺物少量有。　29．明褐灰色（10GYR/1）シルト。一部黄色（2.5Y7/8）に変色有。
※１～４は現代の盛土、撹乱土。５～23はＳＤ－４埋土。24～26は耕作土。28は土坑１埋土。29は基盤層。

第11図　検出遺構平面・断面図（１：80）

村重のたてこもる伊丹有岡城攻めに利用したと伝えられる原田城（北城）関連の遺構が巨大な堀割とともに多数検出されている。

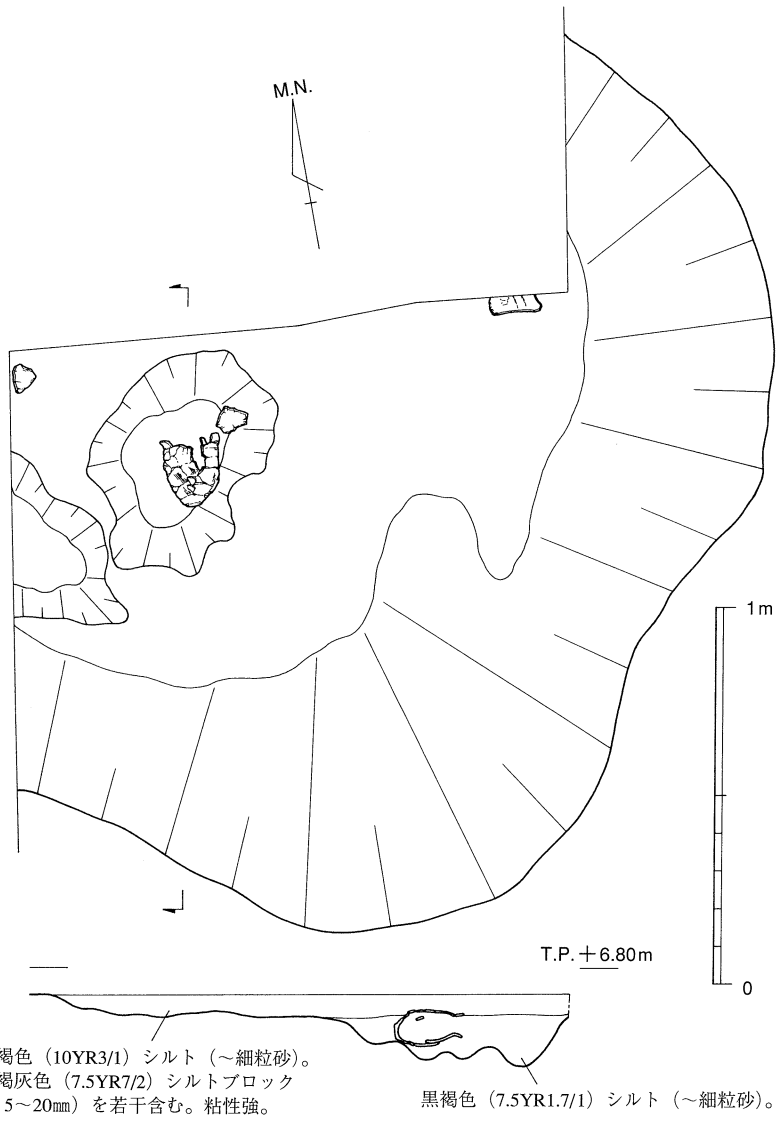
堀割は２カ所で検出されている。西側の「堀１」は検出面での幅約18m、底面の幅約６m、深さ６m程度を測る、非常に規模の大きなもので、これに方形に囲繞された部分が主郭をなすものである。東側の「堀２」は検出面での幅約４m、深さ約２mを測り、規模においては「堀１」におとるものの、「ヨ」字形に配置された複雑な堀割である。「堀１」の開削時期は16世紀後半、「堀２」は15～16世紀中頃に開削されたと考えられ、「堀２」は中世後期から国人領主の居館として整備され、「堀１」は織田信長軍の布陣に伴って新たに軍事的意義から構築されたものと推定される。「堀１」の下底部には、砂礫を含む均質な土砂の流入が見られ、堀割外部に相当規模の土塁が構築されていた可能性が高い。

一方、「文政七年摂津国豊島郡原田村絵図」によると原田城（北城）の南部にも城郭の存在が記されており、原田城では南北２カ所に郭を配置していたことがわかる。ただし、南城については現在までに考古学的なデータは得られておらず、その詳細は不明であった。

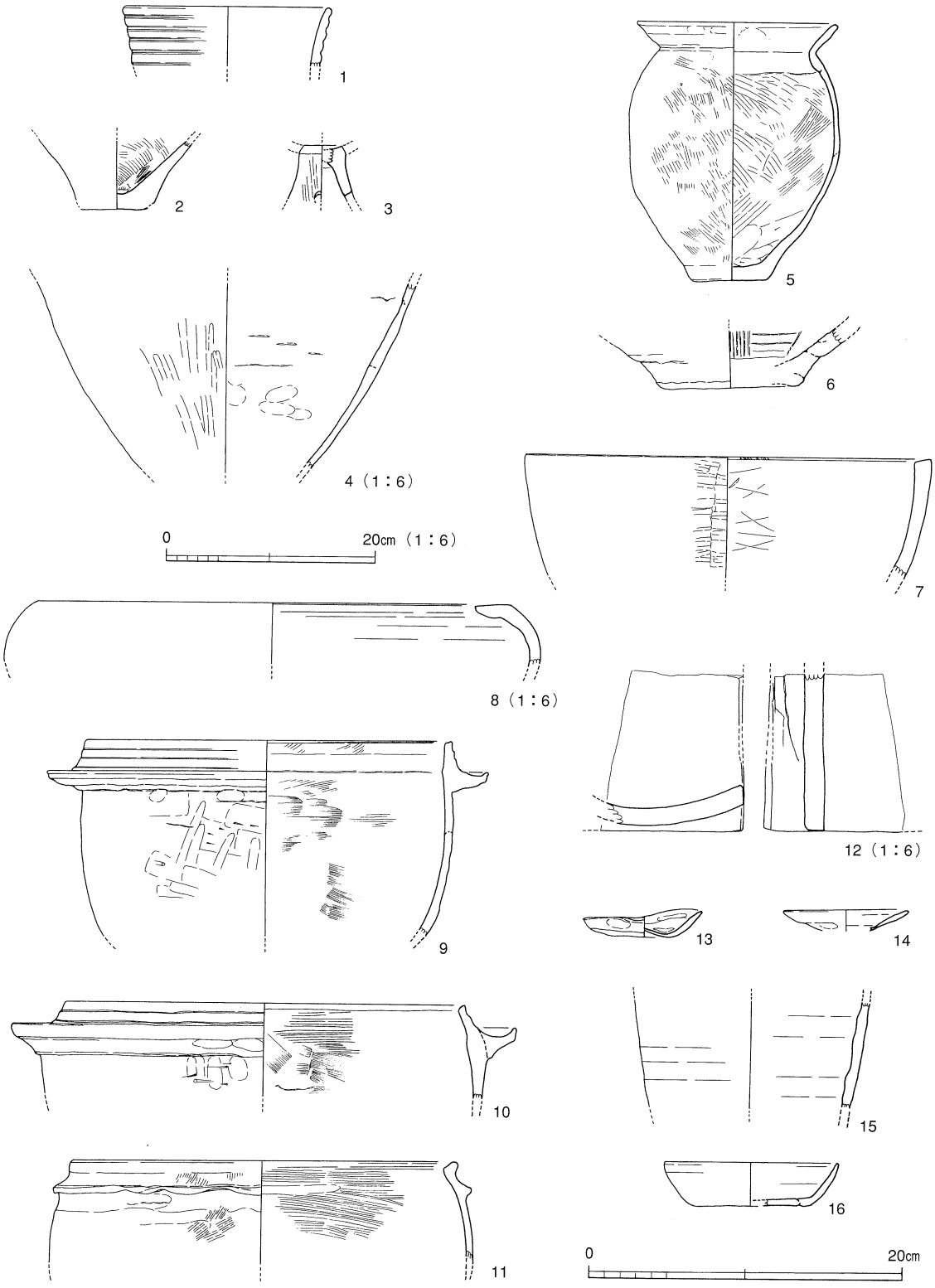
（２）検出した遺構

今回の調査地点は、原田城（南城）の推定地東側に現在の道路を隔てて隣接し、南城の関連遺構が検出される可能性があり、従来から注目されていた地域にあたる。地形的には、独立した舌状の尾根筋の末端部にあたり、耕作痕、井戸、土坑、堀割等を検出した。以下にその概要を記す。

土坑　調査区内の北側で２基の土坑を検出した。土坑１は、直径約２mのいび



第12図　土坑１　土器出土状況平面図（１：20）



第13図　出土遺物（１：４／１：６）※１～３は土坑２、４～６は土坑１、７は井戸、８～16は堀割

つな楕円形をなし、部分的に落ち込む場所が見受けられるが、全体の断面形としては浅いすり鉢状を呈する。埋土は黒褐色系のシルトを基本とし、上層には基盤層をなす灰白色系のシルトブロックを若干含む。下層は上層と比較して色調が暗く、均質である。遺物は、概ね上層と下層の間隙に出土することから、下層にあたる部分は、人為の影響を受けずに変質した、たとえば樹木の根による撹乱堆積層の可能性がある。出土遺物から、土坑１は弥生時代中期～後期末に機能していたものと考えられる。土坑２は土坑１の東側に位置し、直径約80㎝程度の隅丸方形をなす。断面の形状は土坑１同様、浅いすり鉢状を呈し、埋土もややブロック土の混入比率が高いものの、基本的には土坑１の上層に近似する。土坑２は、出土遺物から、弥生時代中期（畿内第４様式期）を中心に機能していたものと推定される。

堀　割　調査区の南西部に北西から南東方向へ直線的に掘削された堀割を検出した。調査区外へ広がる部分が多いため、正確な規模は不明である。調査区南西隅で底面レベルが上昇していく傾向にあることから、ここを中心に反転して幅員の根拠とすれば、約5.6ｍの規模を持つことが推定される。深度に関しては、現状では50㎝程度を測るにすぎないが、後世の水田開発等によって肩部の多くが大規模に削平されていることを考慮すれば、元来は１ｍ以上の深さを有した可能性がある。埋土は上半部が褐灰色系の中粒砂（～シルト）を主体としたもので、堀割が機能を滅失したのち、埋め戻された堆積土であろうと考えられる。一方、底面に近くなるとシルト質で粘性の強いものが若干見られるが、砂礫で構成される堆積土が大半を占め、平常時はほとんど止水堆積の状態におかれることはなく、一時的な雨量の増加等によって砂礫が供給された状況が看取される。第１次調査で検出された原田城（北城）の堀割は２条ともに同様の堆積状況から、いわゆる空堀であったことが指摘されていて、規模についても堀２と近似しているため、原田城（南城）関連の遺構とみなすことが妥当であろう。底面付近から出土した遺物が、概ね15世紀後半を前後する時期を示していることもこの傍証と考えることができる。

（３）出土遺物

出土遺物は第５図に示したように土坑を中心とした弥生時代中期～後期末の土器群と、井戸や堀割を中心とした室町時代末期～戦国期の土器群に大別できる。弥生時代中期の遺物については原田遺跡では初見であり、曽根遺跡に展開する集落が低地にまで進出していた証左となることから、今後の資料の増加が待たれる。一方、室町時代末以降の遺物については原田城（南城）の存在を示唆するとともに、貿易陶磁が見られることで15世紀段階での原田村の有力者の生活を垣間みることができる資料となっている。

３．まとめ

今回の調査では、原田城（南城）関連遺構の存在を確認することができたが、範囲が限定されていて詳細を明確にすることができなかった。今後の周辺での調査に期待したい。

第Ⅴ章　蛍池北遺跡第24次調査

1．調査の経緯

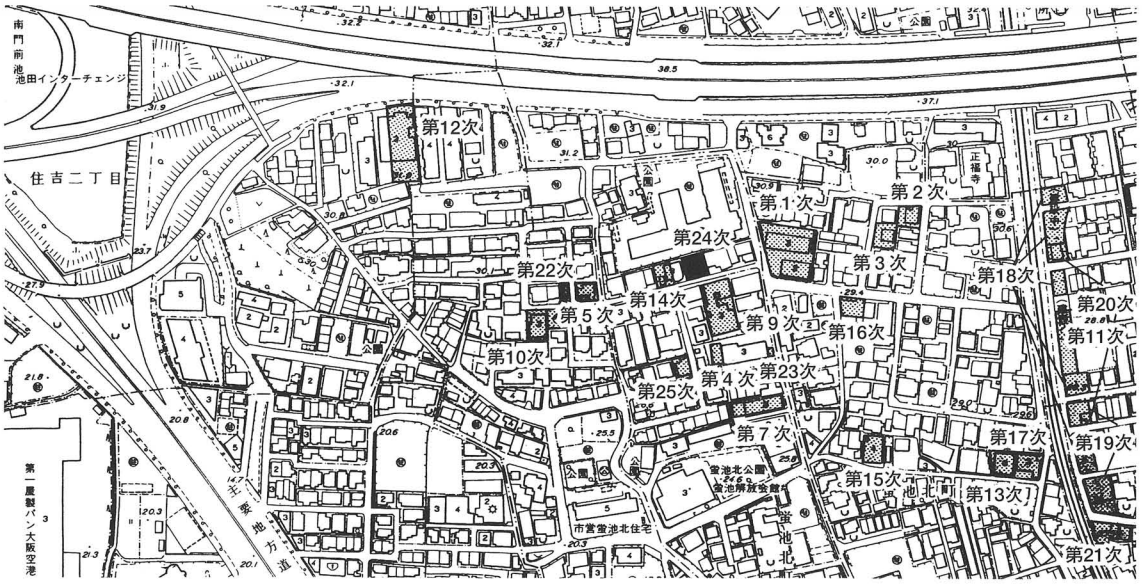
当調査区は豊中市蛍池北町２丁目43－４に所在する。共同住宅の建設に伴い、平成11年（1999年）２月１日に提出された埋蔵文化財の届け出に基づき、平成11年（1998年）９月17日に試掘調査を実施したところ、地表下約40cmのところで遺構面を検出した。これに伴い協議を行った結果、遺構の損壊は避けられず、平成11年（1999年）10月１日から発掘調査を行うことになった。

第14図　調査範囲図（１：400）

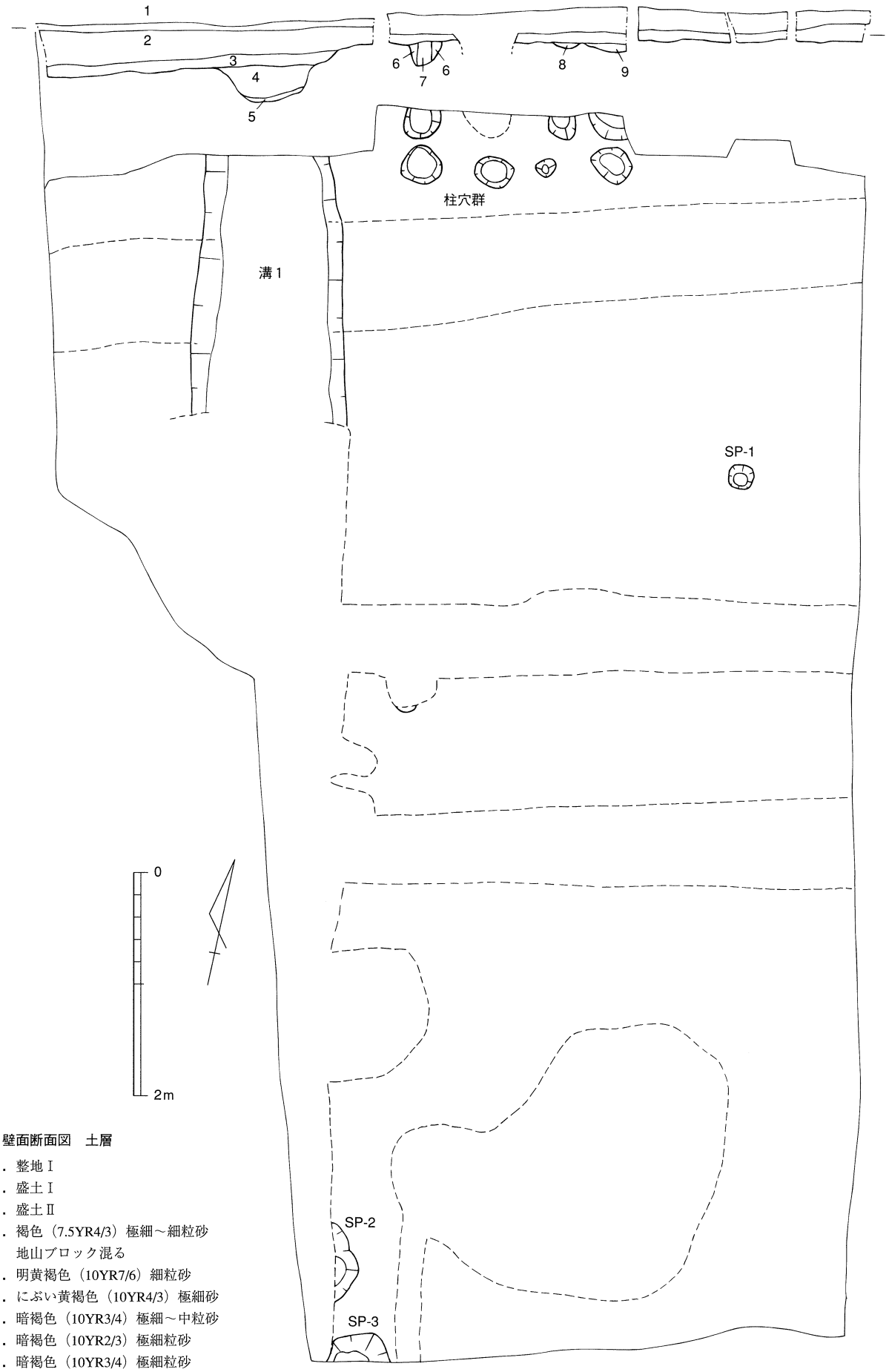
2.調査の成果

（1）基本層序

当調査区は、待兼山丘陵から派生する低位段丘上に位置する。段丘上はなだらかな平坦面となるため、丘陵や河川からの土砂の供給は受けにくく、また中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境にある。このような環境もあって、当遺跡においては集落跡などにともなう包含層、さらには遺構上面に及ぶ削平を受ける場合が少なくない。当調査区においてもその例にもれず、遺構は表土直下の段丘堆積層上面で検出した。なお調査区では、家屋の解体に伴い著しい削平などをうけ、耕作土や遺構包含層等は検出されなかった。



第15図　調査地位置図（１：5,000）



※壁面断面図　土層

1．整地Ⅰ
2．盛土Ⅰ
3．盛土Ⅱ
4．褐色（7.5YR4/3）極細～細粒砂
　地山ブロック混る
5．明黄褐色（10YR7/6）細粒砂
6．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細砂
7．暗褐色（10YR3/4）極細～中粒砂
8．暗褐色（10YR2/3）極細粒砂
9．暗褐色（10YR3/4）極細粒砂

第16図　調査区平面・断面図（1：50）

（2）検出した遺構

調査区からは、若干の柱穴と溝１条を検出した。柱穴の多くは削平が著しく、ＳＰ－16を除いて深くても５㎝程度しか残存していないこと、また撹乱などにより調査区が著しく破壊されているため、明確な掘立柱建物に復元できるものはなかった。以下、主要な遺構について、概要を述べることにする。

溝　１　調査区北半部で検出した幅1.4m、深さ0.4mの溝である。溝の上面は著しい削平を受けているため本来の規模は推定しにくいが、これ以上の規模になることは確実といえる。溝内の埋土は２層に区分でき、上層は黄褐色極細粒砂からなる段丘堆積土及び包含層または遺構埋土に見られる暗褐色極細粒砂の塊状ブロックによる混成土の堆積がみられ、下層は砂礫を主体とする段丘堆積土の再堆積土からなる。溝１は下層の堆積土の状況から溝機能時には一定の流水が予想され、また上層の堆積土から埋め戻しによりその機能を停止したものと考えられることから、用水等の機能が予想される。

なお、溝１からは奈良時代から平安時代中期にかけてと推定される土師器の細片が出土しているが、時期比定の可能な遺物は出土していないため、時期については不明である。

北部柱穴群　調査区北辺で検出した東西に並ぶ柱穴列である。いずれの柱穴も著しい削平をうけ残存する遺構の深さは５㎝に満たないため、断面観察により柱根等の存否を確認することはできなかったが、埋土や検出時等の状況から柱穴と判断した。柱穴間は約80㎝前後で、全長2.3mをはかる。柱穴列の北側は調査区外にあり、また調査区内では関連する柱穴は検出されなかったことから建物となるかは不明であるが、建物と考えた場合、小型の総柱建物となる可能性が想定できるかもしれない。なお、柱穴列からは遺物が出土しなかったため時期は明確にできないが、埋土の特徴から弥生時代のものとは明らかに区分できることから、以後の時期の所産となる可能性が考えられる。

３．まとめ

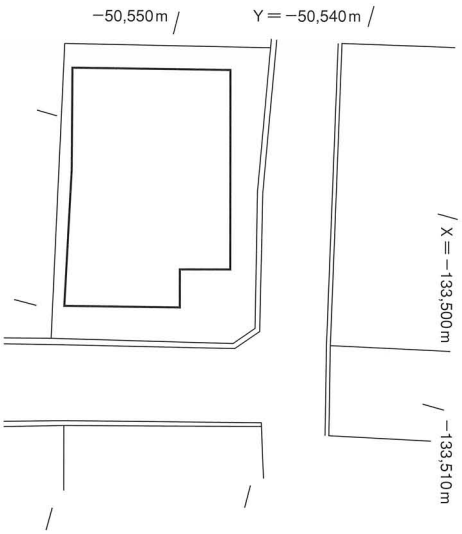
今回の調査では、既設建物の基礎による撹乱などにより著しく破壊されていたにもかかわらず、用水路と考えられる溝および柱穴列などを検出した。このうち、柱穴列の存在は調査区北方に建物群の存在を提起するものとして注意される。なお、柱穴の時期については遺物がなく、明確にはできないものの、各々の柱穴は平面方形となる可能性が推定できること、また当調査区から道路を隔てて南向かいにある第８次調査区では、平安中期頃と考えられる塀を巡らす建物群の一部が検出されていることから、これらの関係から平安期の所産となる可能性が想定できよう。

なお、当調査区周辺は、表土直下に遺構面が検出される可能性が高いことから、周辺における開発については、より慎重な配慮が必要とされよう。

第Ⅵ章　蛍池北遺跡第25次調査

１．調査の経緯

当調査区は豊中市蛍池北町２丁目31－４に所在する。個人住宅の建設に伴い、平成11年（1999年）８月10日に提出された埋蔵文化財の届け出に基づき、平成11年（1999年）９月17日に試掘調査を実施したところ、地表下約50㎝のところで遺構面を検出した。これに伴い協議を行った結果、遺構の損壊は避けられず、平成11年（1999年）10月13日から発掘調査を行うことになった。



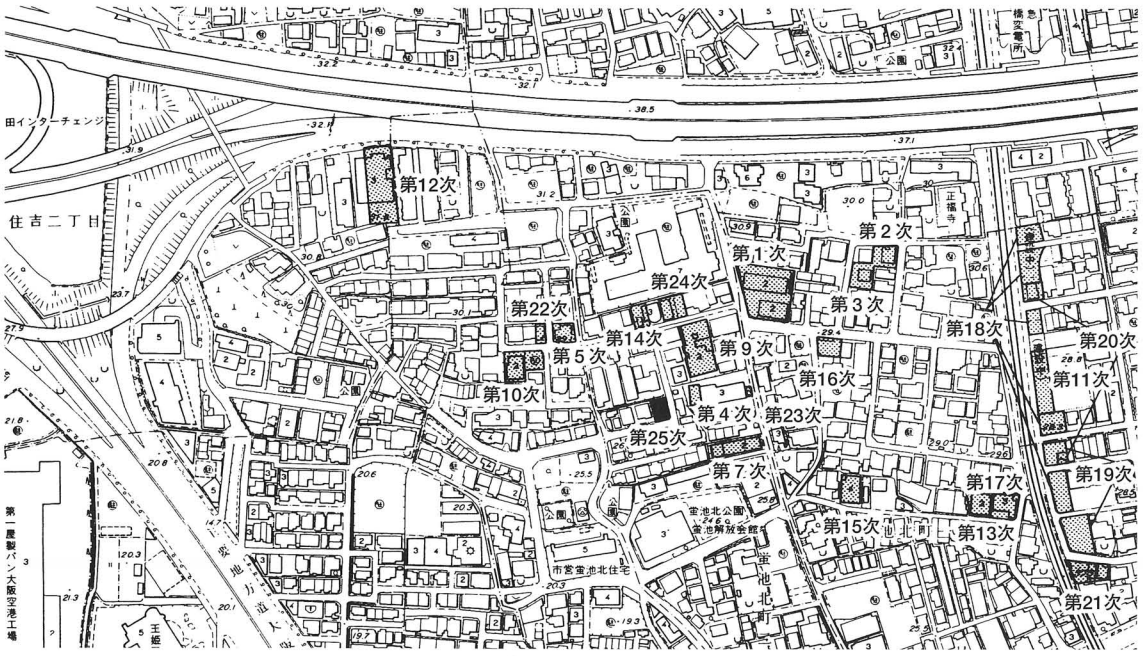
第17図　調査範囲図（１：400）

２．調査の成果

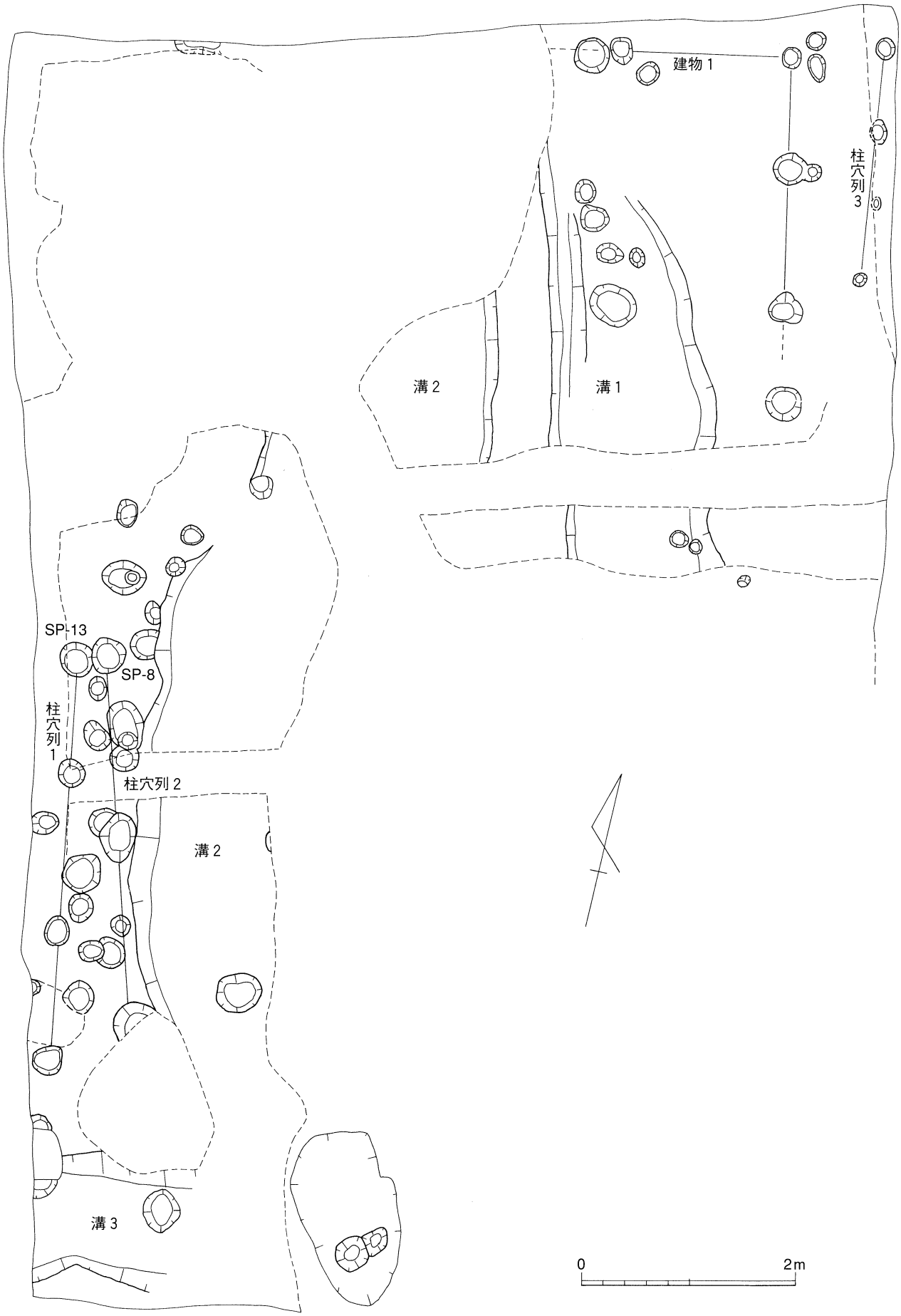
（１）基本層序

当調査区は、待兼山丘陵から派生する低位段丘上に位置する。付近は緩やかな斜面地となるため、丘陵や河川からの土砂の供給は受けにくく、また中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境にある。このような環境もあって、当調査区では集落跡などにともなう包含層、さらには遺構上面に及ぶ削平を受け、遺構は表土直下の段丘堆積層上面で検出した。

なお、調査区では表土下に耕作土を検出したが、層厚５㎝に満たない状況であった。



第18図　調査地位置図（１：5,000）



第19図　調査区平面・断面図（1：50）

（2）検出した遺構

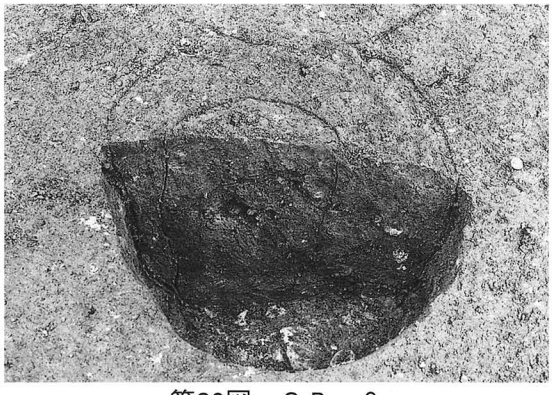
当調査区は既設建物により、遺構面の過半が撹乱によって破壊されていたが、破壊を免れた部分では濃密な遺構の分布状況が伺えた。当調査区からは、柵列、柱穴列、建物を含む多数の柱穴のほか、土坑１基、溝３条を検出した。以下、主要な遺構について報告する。

建物１　調査区北部で検出した掘立柱建物である。遺構の南部および西部は撹乱等により削平されているため、その規模については明確ではないが、検出部分から１間（1.6m）×３間（2.4m）以上の規模を有すると考えられる。また、検出した柱穴も既設建物により約25㎝ほど削平され、柱穴の基底部がわずかに確認できただけにとどまることから、総柱建物になる可能性も残される。なお、建物の時期は、出土遺物がなく明確にはできなかった。

柱穴列１　調査区東部で検出した４基の柱穴からなる柱穴列である。全長3.5mをはかり、主軸はほぼ北となる。柱間の間隔は1.1m～1.5mと均等ではないものの、検出状況からみて掘立柱建物の一部となる可能性が考えられる。なお、柱穴列を構成する柱穴から遺物は出土しなかったため、その時期は明確ではないが、ＳＰ－13とＳＰ－８の重複関係から９世紀後半以降と考えられる。

柱穴列２　調査区西部で検出した３基の柱穴からなる柱穴列で、全長3.5mをはかる。柱穴列２の主軸は、柱穴列１に対しやや西に傾く。柱穴の間隔は1.75㎝前後で、比較的均等であり、側柱建物の一部となる可能性も想定できる。柱穴列はＳＰ－８から出土した黒色土器椀から、９世紀後半前後となる可能性が考えられる。

柱穴列３　調査区北東部で検出した４基の柱穴からなる柱穴列で、全長3.5mをはかり、主軸を略北とする。柱穴の間隔は0.75m前後で、通常の掘立柱建物のものからみると柱間が狭く、柵列となる可能性が考えられる。柱穴列は検出位置から、調査区北方へ伸びる可能性がある。



第20図　ＳＰ－８

溝１・２　調査区中央を南北に伸びる溝であるが、北部と南部は撹乱により削平されているため、全容は明確ではない。

溝１は幅1.5m、深さ0.15m以上、溝２は幅2.0m、深さ0.2m以上をはかる。いずれも遺構が著しく削平をうけており、本来の規模を示すものとは考えにくい。溝内の堆積土は、暗褐色系の細粒砂が主体となるが、段丘堆積土内の石・礫の流入が見られる。なお、溝１上層から土師器および須恵器の細片が出土しているものの、堆積時期を明確には特定できなかった。

溝　３　調査区南西部で検出した東西に伸びる溝であるが、撹乱によりその大部分が破壊されているため、平面形状は明確にできなかったものの、検出部分から幅1.0m以上、深さ0.25m以

上をはかるものと推定される。溝内の堆積土は、段丘堆積層から流入した石・礫を多量に含む黒褐色極細粒砂からなり、第23次調査などで検出した古墳周溝の埋土と類似する。ただ、上層から古墳時代後期以降と考えられる須恵器片などが出土しており、堆積時期に時期差が想定できることから、溝の性格と特定し難い。

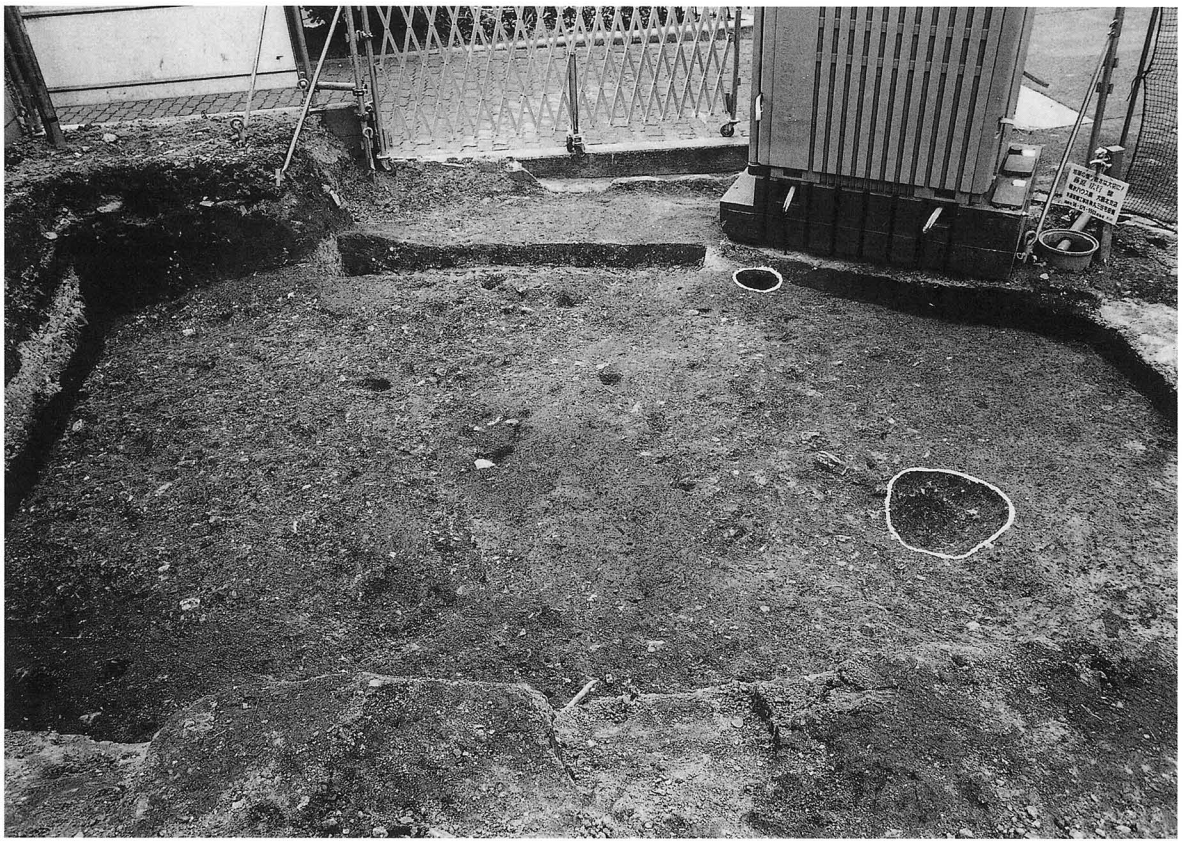
第21図　溝３土層断面

3.まとめ

当調査区は、ほぼその全面が著しい撹乱により削平されていたにもかかわらず、多数の遺構が確認できた。遺構の多くは時期を特定し難いことから、現段階で遺構の時期とその変遷について検討することは困難であるが、これらの遺構群は周辺に広がることは間違いなく、今後周辺における調査の進展とあわせて検討されることを期待したい。

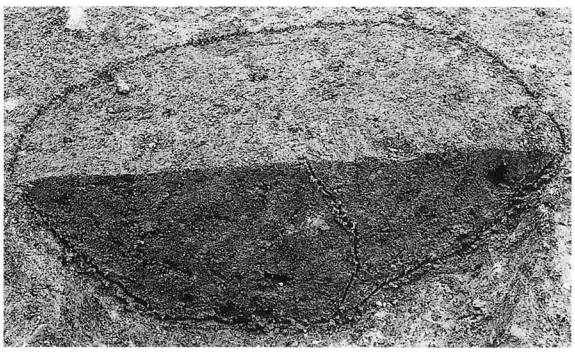
図　　版

図版1　岡町北遺跡第5次調査

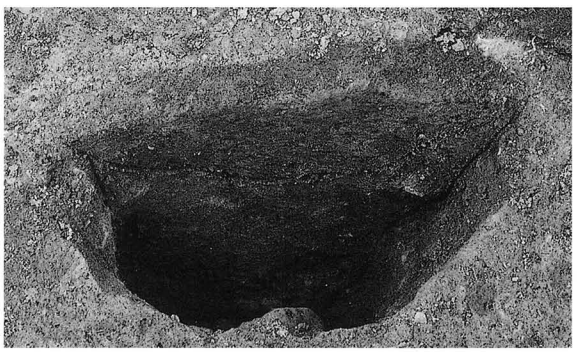


（1）調査区全景

（2）調査区壁面断面（南壁）



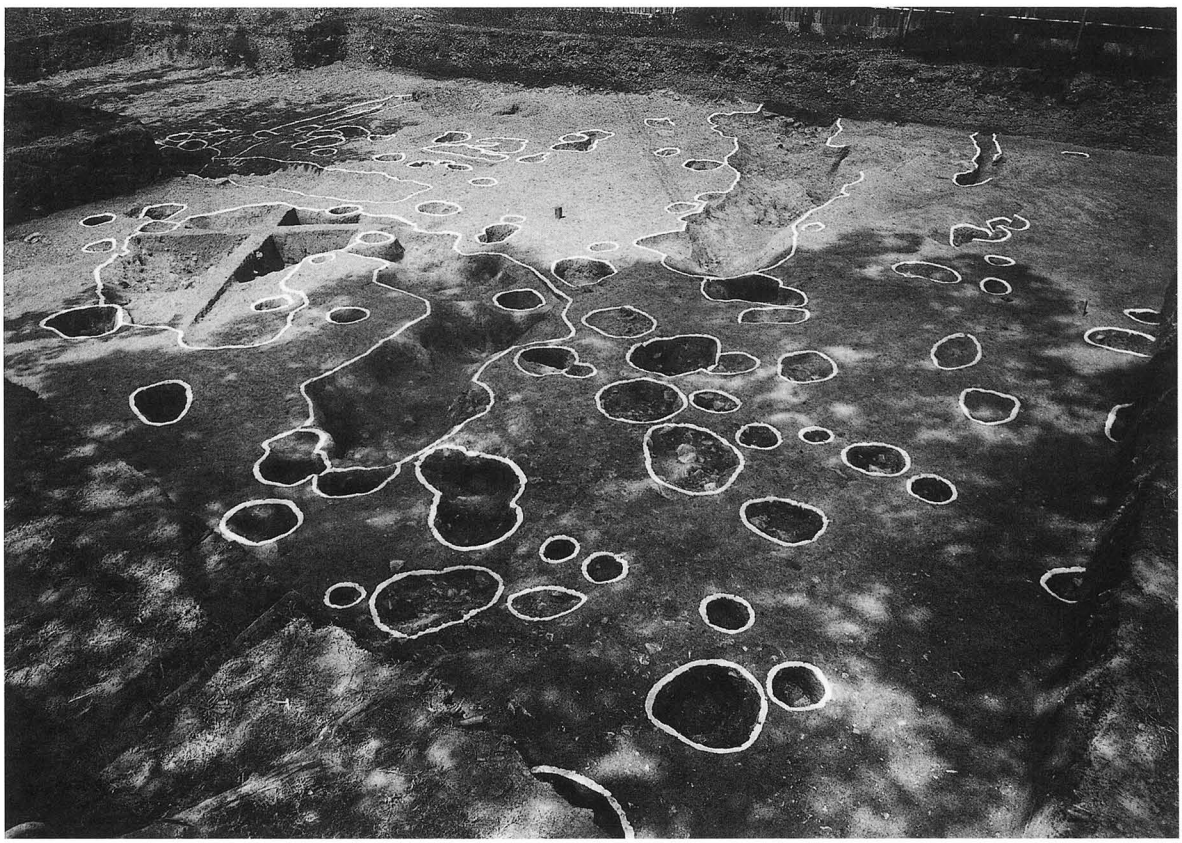
（3）ＳＰ－１土層断面



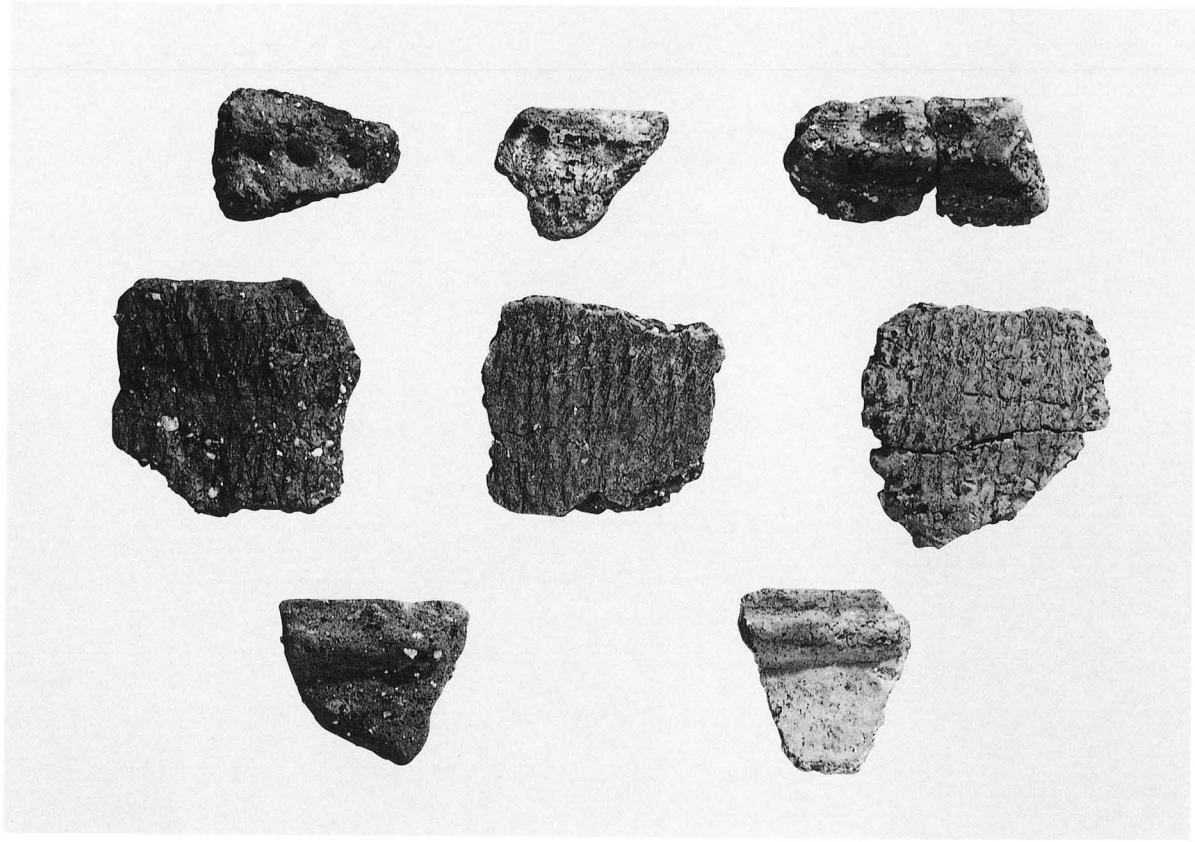
（4）ＳＰ－２土層断面

図版2　野畑春日町遺跡第3次調査

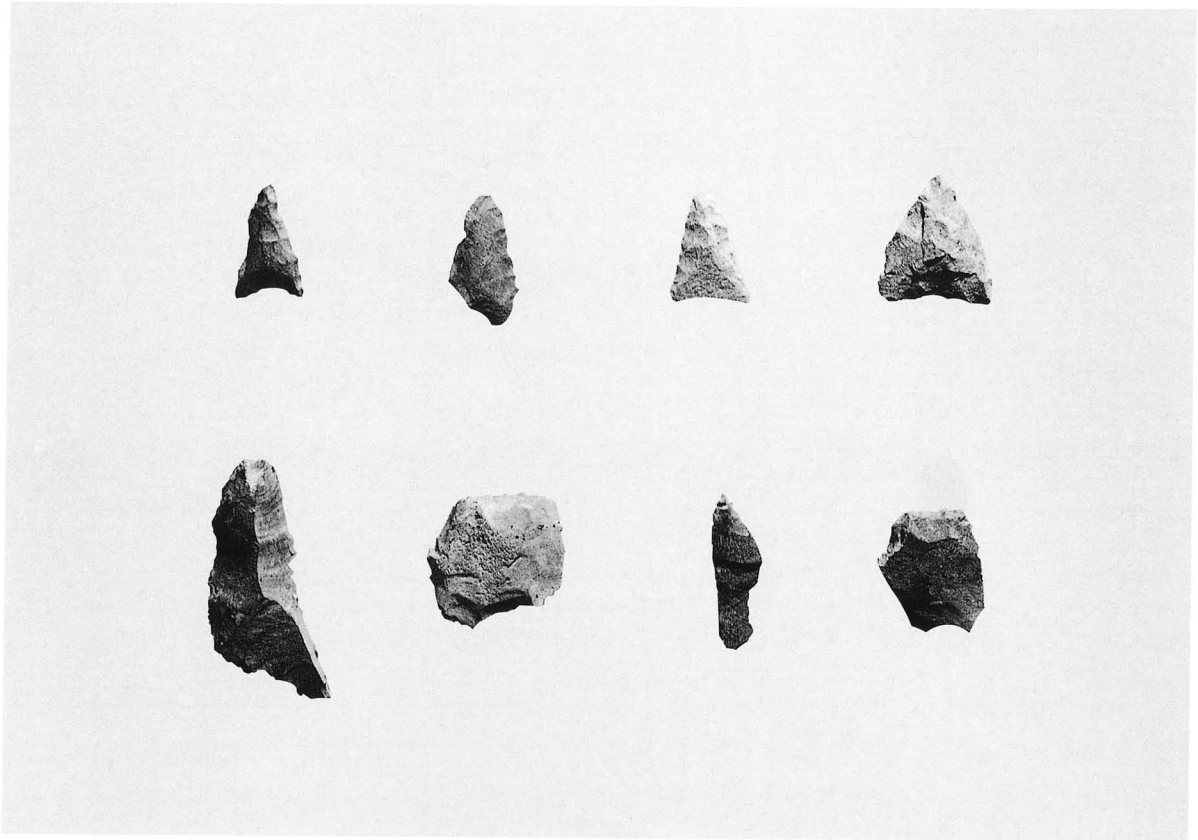
（1）調査区全景（南から）



（2）調査区北半部ピット群（北から）



（1）出土遺物（縄文土器）



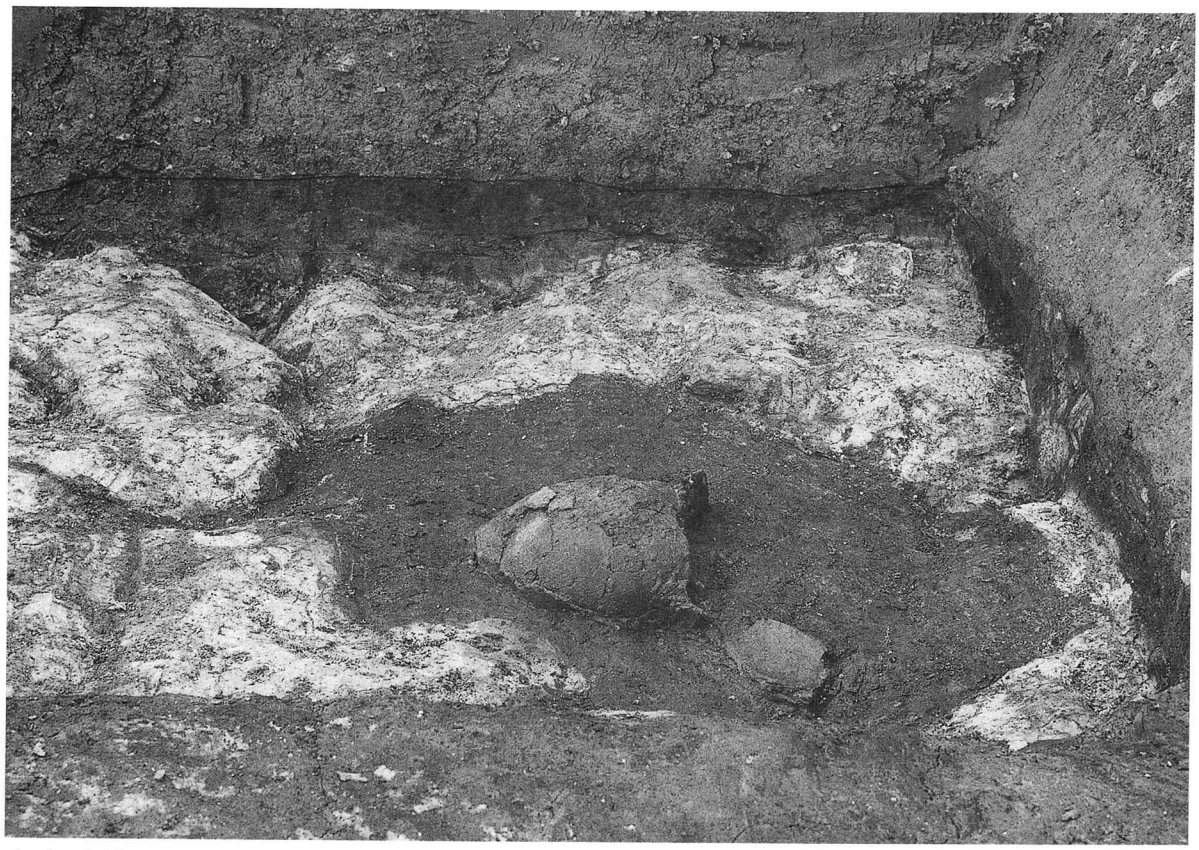
（2）出土遺物（石器）

図版4　原田遺跡第2次調査

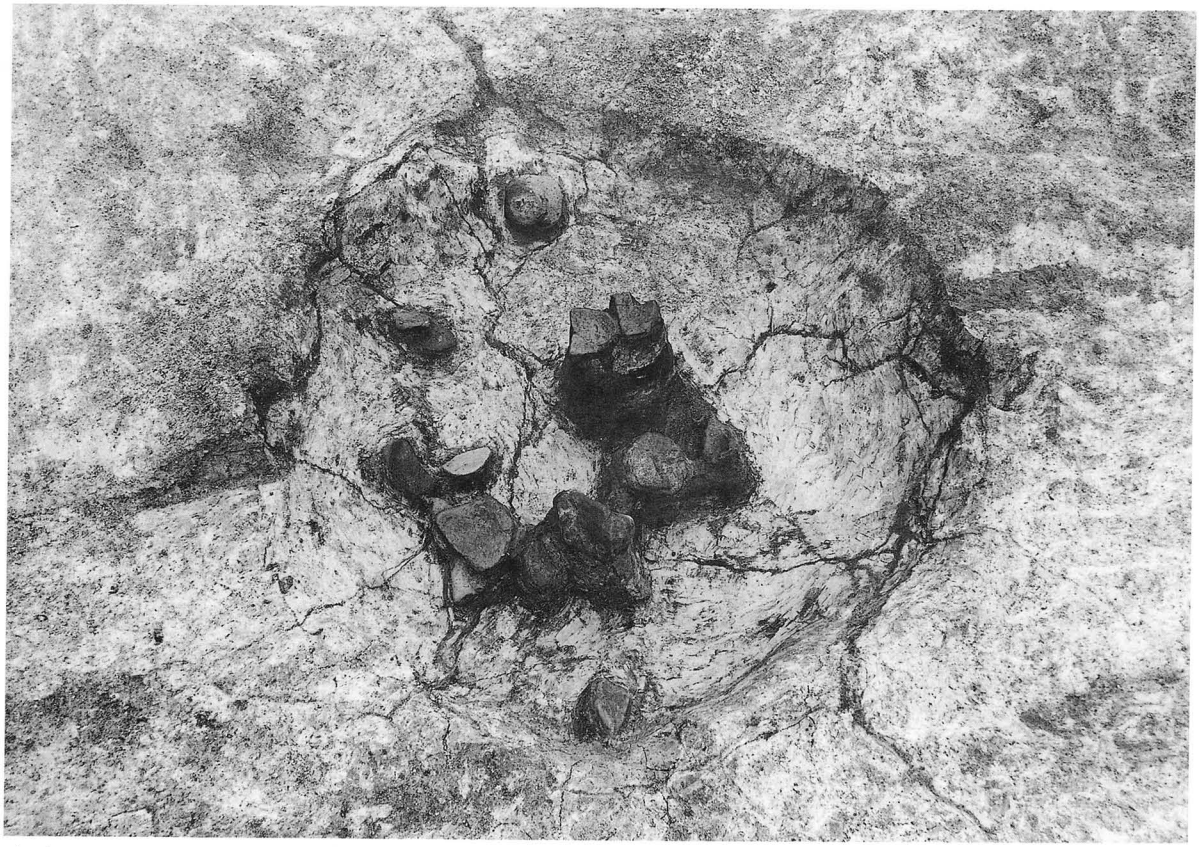
（1）調査区全景（北東から）

（2）調査区全景（南から）

図版5　原田遺跡第2次調査



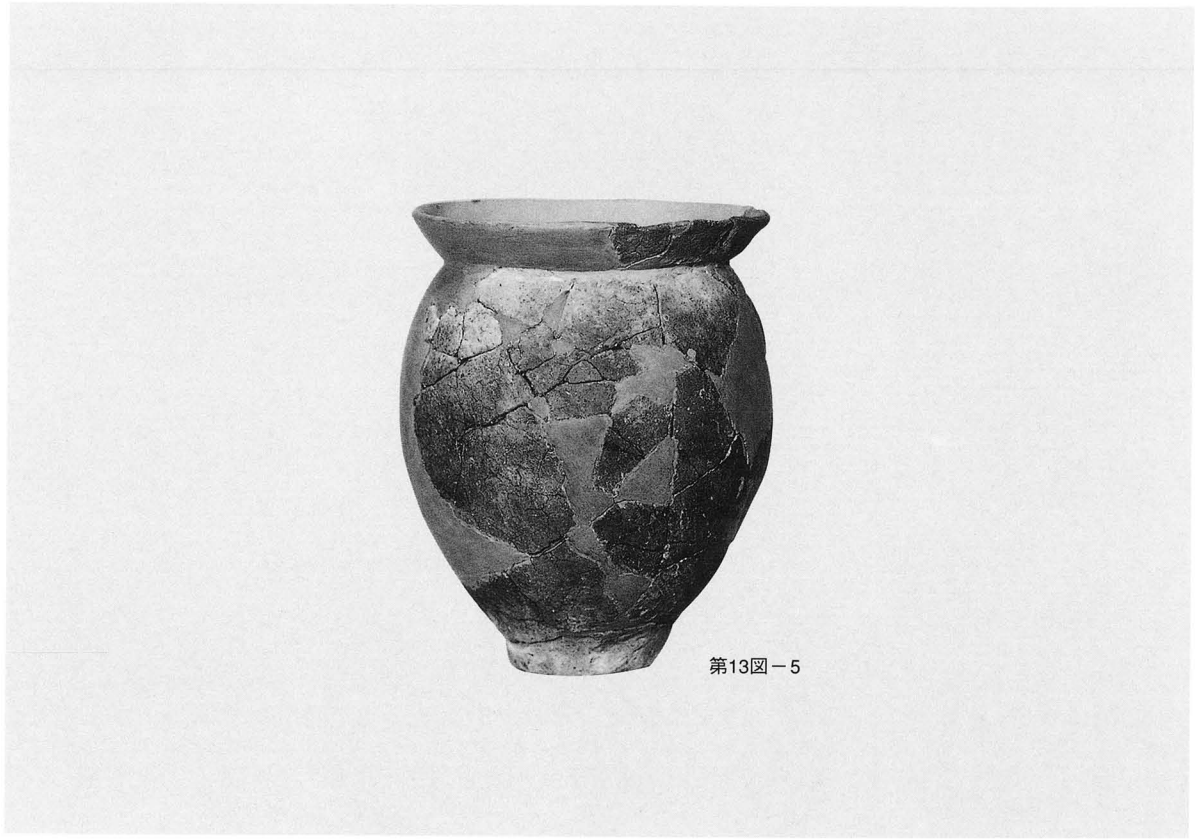
（1）土坑1土器出土状況（東から）



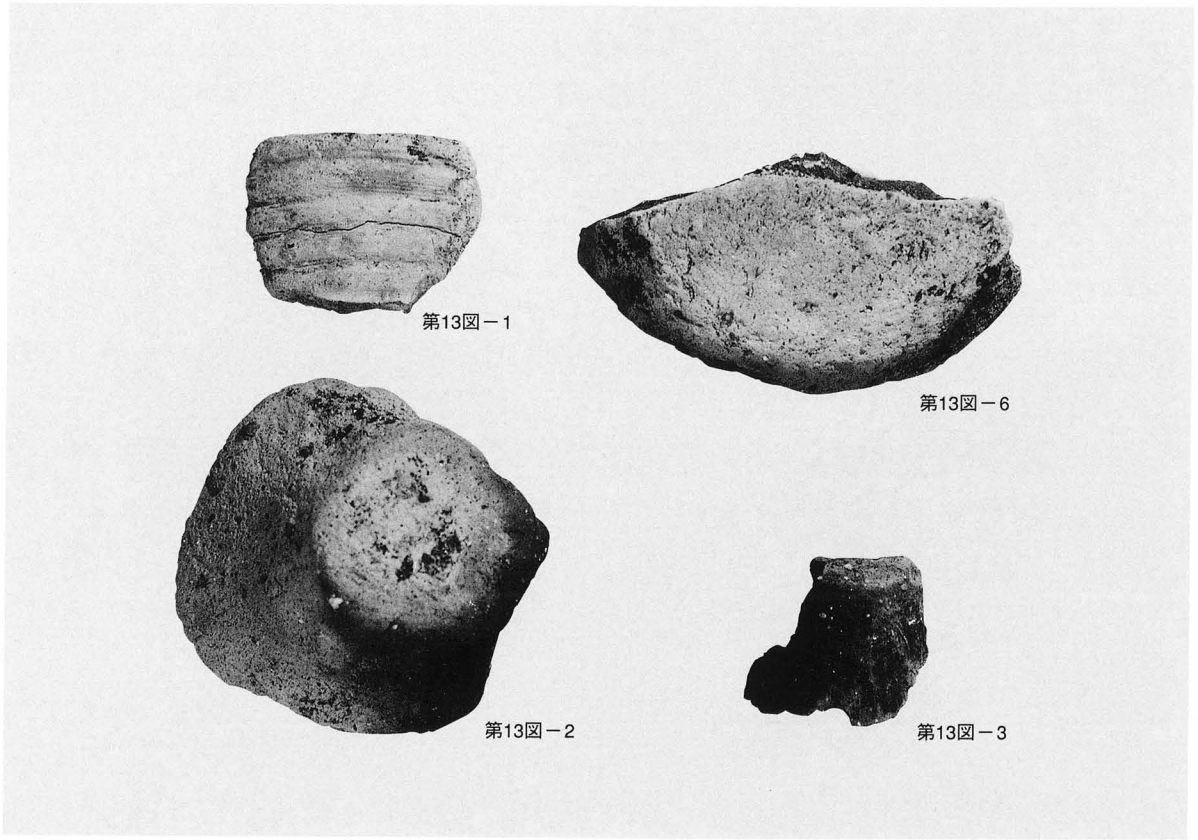
（2）土坑2土器出土状況（西から）

（1）井戸内埋土堆積状況（西から）

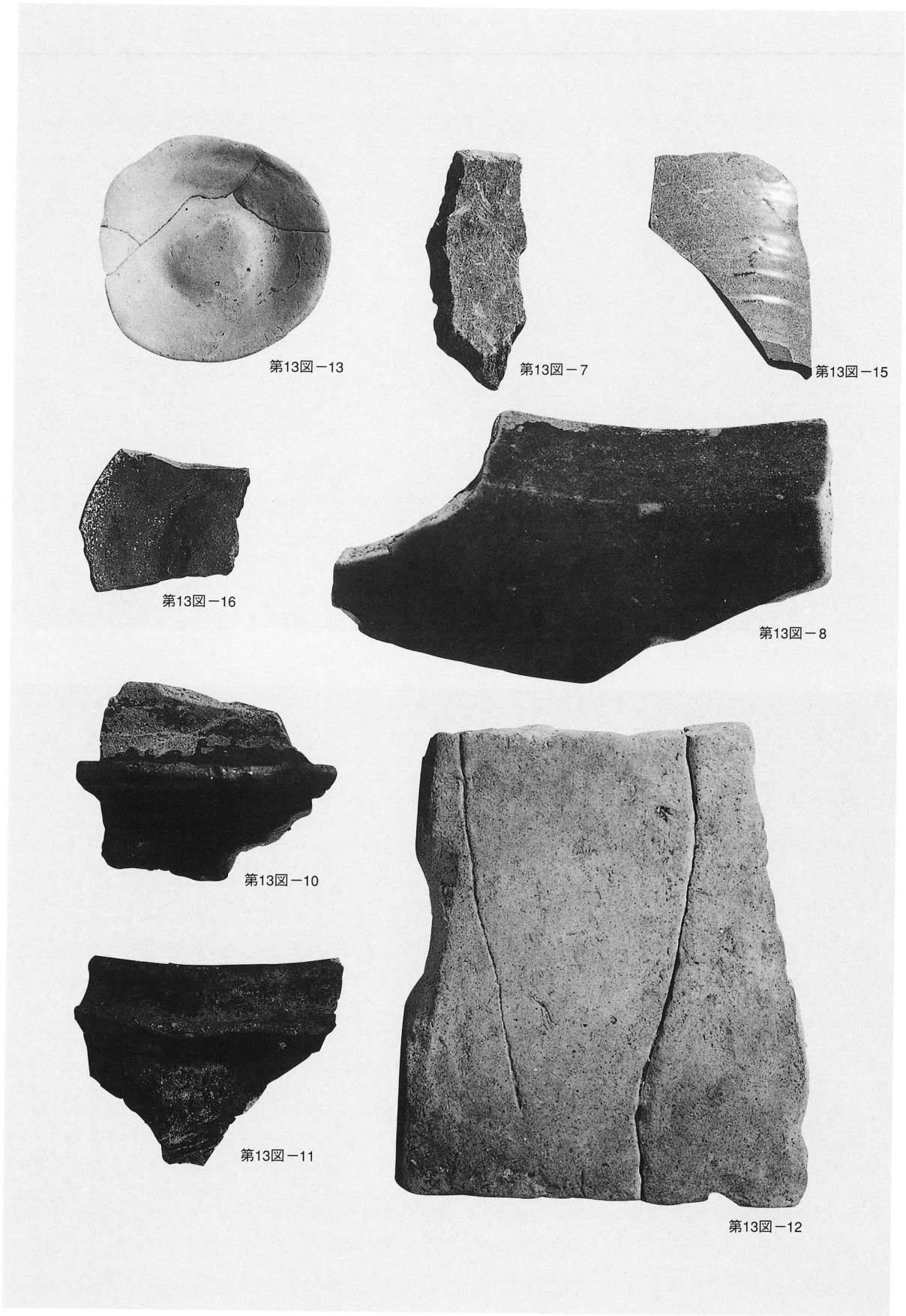
（2）掘割土器出土状況（東から）



（1）出土遺物（弥生終末期甕）

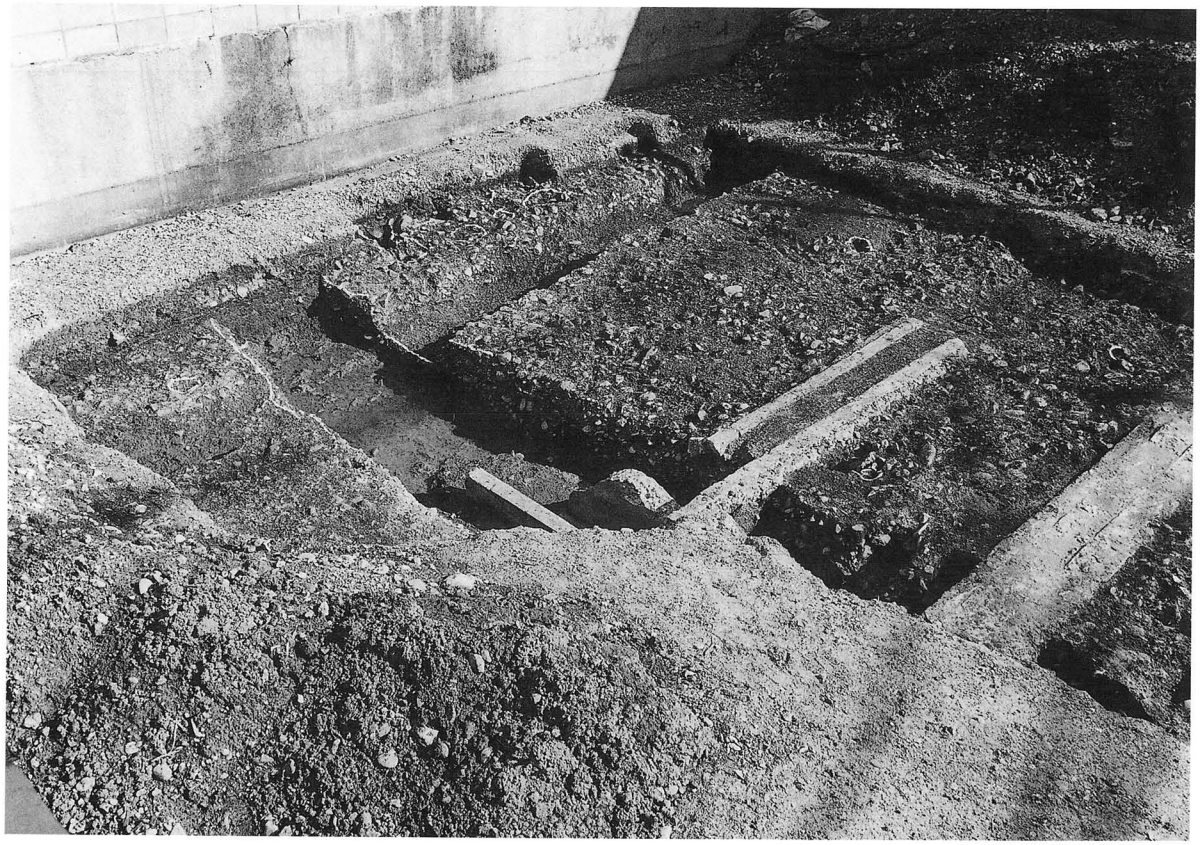


（2）出土遺物（弥生土器）



（4）出土遺物（中世）

図版9　蛍池北遺跡第24次調査



（1）調査区全景（北側）

（2）調査区全景（南側）

（1）調査区全景（北側）

（2）調査区全景（南側）

報告書抄録

ふりがな	とよなかし まいぞうぶんかざい はっくつちょうさ がいよう
書名	豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成11年度（1999年度）
シリーズ名	豊中市文化財調査報告
シリーズ番号	第47集
編著者名	清水　篤・橘田正徳
編集機関	豊中市教育委員会（市町村コード：27208）
所在地	〒560－8501　大阪府豊中市中桜塚３丁目１－１　TEL06－6858－2581（社会教育課）
発行年月日	西暦2000年3月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
岡町北遺跡（おかまちきた）第５次	岡町北（おかまちきた）2－66－30	34°47'38"	135°27'44"	990201～990205	32.75㎡	個人住宅建設
野畑春日町遺跡（のばたけかすがちょう）第３次	春日町（かすがちょう）3－58－1・130	34°48'25"	135°27'34"	990412～990519	200㎡	修道院等建設
原田（はらだ）遺跡 第２次	曽根西町（そねにしまち）2-124-2・141-2	34°45'56"	135°27'42"	990901～990922	84㎡	個人住宅建設
蛍池北（ほたるがいけきた）遺跡 第24次	蛍池北町（ほたるがいけきたまち）2－43－4	34°48'15"	135°27'03"	991001～991022	68.25㎡	共同住宅建設
蛍池北（ほたるがいけきた）遺跡 第25次	蛍池北町（ほたるがいけきたまち）2－31－4	34°47'17"	135°27'03"	991013～991122	112.05㎡	個人住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡町北遺跡 第５次	集落	弥生・古墳	柱穴等	土師器	集落の西端部にあたる
野畑春日町遺跡 第３次	集落	縄文・弥生 古墳	土坑・柱穴等	縄文土器 石器 須恵器	縄文中期の土坑を検出
原田遺跡 第２次	集落・城跡	弥生・中世	井戸・堀割	弥生土器 中世陶磁器 石鍋	原田城南城関連遺構を検出
蛍池北遺跡 第24次	集落	弥生・古墳 奈良・平安	溝・柱穴等	土師器	平安時代の集落関連遺構を検出
蛍池北遺跡 第25次	集落	弥生・古墳 奈良・平安	建物・溝等	須恵器 黒色土器	古墳～平安時代の集落関連遺構を検出

豊中市文化財調査報告書第47集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成11年度（1999年度）

発行　豊中市教育委員会
豊中市中桜塚3丁目1－1
平成12年（2000年）3月31日
印刷　㈱きたがわぷりんと